
湯けむり旅情二人旅～温泉レースへようこそ！～

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

湯けむり旅情二人旅〜温泉レースへようこそ〜

【Nコード】

N4127H

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

シャッフル企画・（キャラクター原案提供者名：針井龍郎さま）
（執筆担当者：文樹妃） 御手洗隆史^{みたらいたかし}十九歳、平凡普通な大学生。
ちよつと変わったところといえば、痩せすぎていることぐらい。そんな僕には温泉好きな温井泉^{ぬくいずみ}という腐れ縁の女の子がいる。いつもの週末、突然温井に誘われたことから始まった、温泉への二人旅。そこで始まる不思議なレースと、僕らの関係は 気軽に読める温泉ラブコメディです。

ぶろろーぐ、僕と温井の腐れ縁（前書き）

このお話は、第二回シャツフル企画に参加した作品です。針井龍郎さまの設定したキャラクターで私、文樹妃が考えたストーリーとなっております。

ぶろろーぐ、僕と温井の腐れ縁

彼女と最初に出会ったのは、中学二年のクラス替えの時だった。

今は茶髪でショートボブな髪型も、当時は長い黒髪で、背中にまっすぐ垂らした三つ編みが綺麗だな、なんてぼんやり思ったことを覚えてる。

大人しそうな普通の子だな、というぐらいの印象しかなくて、きっとそのままじゃ記憶にも残らなかつただろうと思う。彼女の名前が、『温井泉』^{ヌクイスイズミ}なんて変わった物じゃなければ。

『ご丁寧に『趣味は温泉めぐりです』なんて自己紹介してくれたもんだから、クラスの全員が一瞬にして温井の顔と名前を覚えたもんだ。

同じく変わった名前であるほうの僕は、一緒になつてからかわれりたりもして、実はちよつと迷惑だった。

それもあって、僕は温井とたいして話をしたこともなかった。

特に中学なんて変にませ始める頃だから、どつちかといえば避けてたかもしれない。

温井のほうはどう思ったのか、別にあまり意識した様子もなく、ただのほほんと女友達と笑っていたけれど。

容姿は特別可愛くも不細工でもなかったけど、あまり世間一般のことを気にしてないような、自分が好きなことにしか反応しないような不思議な子だった。

その微妙なズレ具合がいいとか、ほんわかした笑顔に癒されるとか言つて少しずつ温井の名前が男どもの間で出る回数が増えていたりもしたけど、僕は正直あまり興味を持つちゃいなかったんだ。いや、きつとそれから興味を持つことはなかっただろう。

あの日、衝撃の遭遇を果たさなければ。

そう、あれは朝から小雨の降る肌寒い日だった。大粒の雨の雫が青やピンクの紫陽花にポタポタと落ちていて、いつもの通り道が綺麗に見えた。ってそんなことはどうでもいい情報か。

けどどうでもいいことまで詳細に覚えてる。それほど衝撃的な一日、いや一瞬の大事件だったのだ。

えっと、落ち着いて順に説明しよう。

僕のじいちゃんは、町内でも一番古い銭湯を営んでる。たまに大きな風呂に浸かりたくなったら入りに行ったりはしてたけど、その日の僕は、ただ風呂に入りに行っただけではない。

じいちゃんが腰をいためて、いつものおばちゃんも風邪で、バイトの兄ちゃんも急な法事で抜けるとかで、仕方がないから番台を任されたのだ。ちょうど新しいゲームソフトを買った日で、ぶつぶつ文句を言ったんだけど、僕の扱い方を心得ている母さんが、夕食当番一週間免除を約束してくれたから、あっさり僕はじいちゃんの銭湯『富士の湯』に向かった。まあ平日だったし、違うバイトの兄ちゃんが応援に来てくれるまでの二時間ほどだからってんで、僕はすっかり気を抜いていた。とにかく一週間も夕食の献立を考えずに済む、なんて夢のような話に舞い上がっていて、さてこれから一週間、どうやってフリータイムを過ごそうか。そんな考えで頭の中はいっぱいだった。

ちょうど銭湯に着いたら、テレビではどうでもいい二時間ドラマが始まってて、番台からぼんやり見てた。

その時だった。突然叫び声があったのは。

女湯のほうで「痴漢よー！」というおばちゃんの甲高い声が出て、机に付いていた肘がずり落ちて、ついでにメガネまでずり落ちて、あわあわしながら僕は立ち上がった。

なんだって銭湯の中で痴漢なんだ、とか、ものすごい巨漢で、ナイフとか持ってたらしよう、とか、様々な不安が瞬時に渦巻く。脳内でじいちゃんに思いつきり文句を言いながら、女湯の前で一瞬立ち止まり、数秒迷った拳句に僕は暖簾を潜った。自分が痴漢を捕

まえるつもりだったのかと聞かれると今でも違つと断定できる。だって、自慢じゃないけど僕は背だけは高くせに、吹けば風に飛ばされそうだとか、押したら折れてしまいそうだとか言われるやせっぽち。決して巨漢の痴漢男と対決できるようなツワモノじゃないんだ。実は運動神経が鈍いほうじゃないし、持久力なんかにはわりと自信があるんだけど　　ってそんなことをぐだぐだ言ってる場合じゃなく、とにかくその時の僕は、何も考えずに様子を見に行つた、というか行つてしまったというのが本当のところだつた。

どきどきしながら女湯に足を踏み入れた時、正直違つどきどきが胸の片隅にはあつたかもしれない。

だけど大体六割くらいは問題の『痴漢』を何とかすべく突入したわけだ。

そんな僕の前には、恐ろしい光景が待っていた。

不必要に（いやある意味必須か）タオルを巻いたおばちゃんたちが僕をわらわらと取り囲み、なんだかんだと騒ぎながらガラス戸のほうへ追いやつた。

そこで気づいたのは、痴漢が侵入するとすれば奥の露天風呂（というには名ばかりのちっぽけな屋外風呂だ）だということで、垣根のどっかから覗いたのか、それとも本当に忍び込んできたのかという疑問。

まあとにかくターゲットは外だと、露天風呂の戸を開けた。それはもう勇氣を持って、ガラツと。

そして目が合ったのだ。

巨漢の男を背負い投げしている一人の女と。

まさにぶん投げたその瞬間に。

女が男を投げているとか、本当に侵入した変態がいたのかとか、そりゃもう驚きポイントは数々あつたわけなんだけども、それより何より僕が驚いたのは、その女がよく知ってる顔をしてたことだつた。

男の背中が見事に石の床にぶち当たるのをスローモーションのよ

うに見ながら、僕はあんどりと口を開けていた。そして向こうも口を開けていた。

それからあわてて薄いタオルだけが巻かれた体を押さえた。

だけど努力空しく白い布きれはぺらりと床に舞い落ちて、その中身をあらわにした瞬間。

僕は鼻血を吹いて、ぶっ倒れた。

その日から、僕と温井の腐れ縁は始まってしまったんだ。

まったくもって不可抗力に。

いち、旅の始まりは突然に。

「……ねえ、隆史^{タカシ}くん」

耳元で甘い声が囁いた。

寝返りを一つして、僕は布団にもぐりこむ。

「隆史くんってば」

布団を捲り、声が追いかけてくる。

「隆史くん、隆史ちゃん？」

心地いいまどろみの中へ逃げ込もうとする僕の肩を掴んで、そつとゆするのは声の主。

うつくん、と不機嫌な声で唸った僕の耳元へとどめの一声。

「タ・カ・シ」

まさにハートマーク付きの声音で呼ばれて、おまけに耳に息を吹きかけられて、僕はあわてて飛び起きた。

「うわあっ！ なっ、なっ、なっ」

ぼんやりと見えた人影に言葉も出ず、布団を握り締めて飛びすさつた僕と対照的に、声は冷静に言う。

「はい、メガネ」

差し出されたものをとりあえず受け取って、急いでかけてから目をこらすと、いつもの顔が笑っていた。

「……なんだよ、温井^{ヌクイ}かあ。びっくりさせないでくれよ、もう」

ほっとしたような、複雑な気分ではやいた僕に、温井は悪びれずに舌を出す。

「へへ、今日はね、セクシーなお姉さん作戦。さすがに驚いたみたいだね。おかげですんなり起きられたでしょう？」

「何言ってるんだよ、また朝っぱらから人の部屋に勝手に入り込んで

……」

大あくびと共に、まだまだぼうっとした頭をガリガリ掻いて呟く

と、温井は「あきれた」と大げさに自分の携帯の液晶画面を見せつけながら、時計のところを指差した。

「午前十一時四十五分。これが朝っぱらって言うのかなあ？ それにおじいちゃんから鍵受け取ってるんだから、不法侵入みたいに言わないでよね。あんたを起こすのが私の正当な役目なんだから」

心外だとも言いたいのか、少し頬を膨らませた温井がカーテンを開ける。一気にまぶしい日差しが入り込んで、とどめとばかりに僕の寝ぼけ眼を攻撃した。

「さあさあ、さっさと起きた、起きた！ ついでにお腹すいたんだけど、ご飯まだ？」

「はあ？ またかよ〜なんで自分家で飯食って来ないんだよ。ここの定食屋じゃないんだけど」

文句を言った僕を、温井のじつとり眼が見つめる。

無言の脅迫だ。

ワタシニ サカラウツテイウノ？

そう聞いているのはわかっている。

うつと口ごもった瞬間、温井はさつと笑顔に変わり、両手を合わせて僕を見つめた。

「いいじゃない、だって隆史くんのご飯、おいしいんだもん！ さすが子供の頃から料理に親しんでるだけあるわよね〜もう腕はプロ級だし、そこらへんで下手な料理食べられないよ〜」

言つてにへつとにやけた温井の顔に、僕はちよつと頭を掻いてしまつた。

「子供の頃から親しんで、って ただ母さんが仕事で忙しいから仕方なくってだけだよ。おだてたつて別にいいもん出ないぞ」

「まあまあ。私本当に尊敬してるんだよ〜母一人、子一人で頑張ってるんだなつて。えらいよ、隆史くん！」

「いやまあそれほどでも……」

とまあ、こんな感じで、気づけば僕はまた台所に立っていた。

しまった、また温井のペースにはまってる。

ため息をつきながらも、いつものことだと半分あきらめ、僕は工
プロンをつけた。

……まったく、じいちゃんも余計なことをしてくれたもんだ。

常連である温井とすっかり顔なじみなじいちゃんが、調子に乗っ
て『富士の湯無料入浴回数券』なんてものをぶらさげて提案したの
だと、ニヤニヤしながら母さんに聞かされたのは既に入学式の前夜
だったつけ。

大学に入ってついに夢の自由な一人暮らしのはずが、気づけば早
二ヶ月。毎日毎日温井からの目覚ましコール、更にそれにも答えな
かった場合はこうして突撃寝起き訪問。これじゃあ実家にいた時と
大して変わらない。

起こしに来るのが母さんか、温井かなだけの違いだ。

確かに脅威の低血圧な僕だから、温井が起こしに来なかつたら講
義に遅刻してたかもしれない、なんてことは一度や二度や三度や四
度……ってまあ、助かってるのは事実だけでも。

くそう、母さんがあっさり一人暮らしをオツケーした時からなん
かおかしいとは思ってたんだよなあ。このアパートが、温井の家と
目と鼻の先だなんて 知らなかつたとはいえ、迂闊だった。

ってアレ？

「今日土曜日じゃなかつたつけ？」

僕がそう訊ねたのは、温井がすっかりと今日の献立 豆ご飯と
アサリの味噌汁、ほうれん草のお浸しにひじきの煮物、塩鮭、そし
て冷奴 を平らげた後だった。

「うん、そうだけど。あ、ごちそうさま。今日もおいしかった！
やっぱりいい腕してるね！ よっ、料理人！ 温泉旅館の朝ごはん
みた〜い！」

相変わらず全く悪びれもせず全開の笑顔でそう言われて、僕は
またまた頭をかいたりなんかして。

「いやいや、それほどでも……って、ごまかすな！」

あんまりつまそうに食べるもんだから、豆を昨日のうちに下ごしらえしといてよかったな、とか、味噌汁と煮物が昨夜の残り物なのが悪いな、なんて思っちゃうじゃないか。

イカンイカン。またこいつのペースにはめられるところだった。

自分への牽制も兼ねてやっとな突っ込んだ僕に、温井は時計を見てから可笑しそうに手を叩く。

「完全覚醒まで一時間か」筋金入りの低血压だね！ いやこりゃ本物だわ」

うんうん、と一人頷くと温井は立ち上がる。

「さてと、腹ごしらえも済んだことだし、そろそろ出発しようか」当たり前のように言って微笑むと、温井が玄関のほうへ向かう。

「え、出発ってどこに？」

訊ねた僕の目に映るのは、小さな旅行カバン。

まるで一泊二日の旅行にでも行くみたいだ。

「そりゃもちろん、温泉よ」

「は？」

これまた当然のように言う温井に、僕はまた首を傾げる。

……一体何のことでございましょうか？

「だから、例の温泉だってば！ 今日から行くなって話だったでしょ？」

とぼけたふりしちゃって、と背中を思いっきり叩かれて、僕はよろめきながら記憶を探る。

例の温泉？ 温泉って……こいつの趣味が温泉めぐりなことは嫌っていうほど知ってる。知ってるけど なんて僕まで温泉？ しかも一緒に？

「えーと、あの……話が見えないんだけど」

しばらく考えても余計にわからなくなるだけだったので、あきらめて正直に答えてみた。

温井は笑ったままの口で何か言おうとして、それから何かに気づ

いたように固まった。固まること数秒。そして今度はわざとらしい笑顔を浮かべ、小首を傾げる。

「誘うの忘れてた、テへ」

「いやいや、テへ、って」

「まあまあいいじゃない。どうせ暇でしょ？　こんな可愛い女の子と一緒に温泉に行こうって誘ってあげてるんだからさ。普通は二つ返事で行くよね？　行くでしょ？　行くに決まってる。ハイ、決まり。しゅっぱーっ！」

大きく拳を振り上げて、添乗員なみにスマイルで引率しようとした温井の肩を掴んで、引き止める僕。

「コラコラ、そこっ！　勝手に決めるな。僕だっていつも暇ってわけじゃないんだぞ」

「嘘ばかり〜彼女もいないくせに、見栄はったってダメダメ」

ちつつつと人差し指を振る温井。

「そつ、それはお互い様だろ？　大体なんでいきなり一緒に温泉なんだよ。お前と違って僕は温泉なんかに興味ないんだ。別の友達でも誘えよな。同じ文学部の女でも何でもいるじゃないか」

悲しいかな、凶星である以前にごまかしようもないほど僕の交友関係も生活パターンもこいつには知られてる。そうさ、週末は大体家でゲームか、男ばつかでむさ苦しく集まってるかさ。

空しく言い返した僕を見上げて、温井は更に迫ってきた。

「女友達じゃだめなの」

「おいおい、なんか目が怖いんですけど？」

「　　なんで」

後ずさる僕。ずいずいと迫り続ける温井。

「なんで逃げるのよ」

「なんで迫るんだよ」

にじにじにじ。ずいずいずい。

そんなに広くもないボロアパートではこの不毛な追いかけっこが続くわけもなく。

ついに背後に壁、目の前に温井。

まさに絶体絶命。まな板の上の鯉。蛇に睨まれた蛙。

ごくり、と唾を飲み込んだ僕に、温井は思いのほか深刻な顔で何やら白い紙切れを差し出した。

「……これ」

パソコンでプリントアウトしたらしい一枚のA4用紙。

そこに躍る文字に僕は目を見開いた。

「……秘境の温泉宿、カップル限定二組ご招待？」

棒読みで読み上げると、温井が頷く。

その表情は先ほどまでの面白がるようなものとは全く違う。真剣そのものだ。

「そう。ネットで応募したら当たったの。だから男の子とじゃなきやだめなの。あなたも知ってる通り、私だって彼氏いない歴十九年だし、こんなこと頼めるような相手、隆史くんしかいないんだもん」
潤む瞳が僕を映す。

薄茶色の髪からほんのりシャンプーの香りが漂う。

一瞬ドキッとして目をそらしてしまった自分に気づかれないように、僕はじとつと温井を睨みつけた。

「そんなの知らないよ 勝手に応募したのはそっちだろ？ いきなりそんなこと言われたって……」

「だってえ、当選したのが嬉しすぎて忘れてたんだもん！ すっかり誘った気になってたっていうか、誘う前から答えはわかってるっていうか……とにかく付いてきてくれるでしょ？」

なんて勝手な言い分だ。

馬鹿にするのもいいかげんにしろよ。

そう言いたいはずなのに、唇からもれ出たのはこんな一言。

「だけど……カップルってことは、部屋とかだって一緒なんだろう？
そんなのさ」

渋る僕に、温井はそんなことなら、と嬉しそうに瞳を輝かせた。

「大丈夫！ 部屋はたくさんあるから二部屋も取れるって書いてあ

るもん。シーズンオフだし、平気だよ。よかつたあ〜！ やっぱ隆史くんなら付いてきてくれると思っただよね。さっ、早く準備して行かないと遅くなっちゃうよ。あ〜あ、まだ髪も梳かしてないじゃない。ほら、早く早く！」

せきたてられて危うく洗面所に向かいそうになった僕は、寸でのところで立ち止まる。

やばいやばい、またいつものペースにはまるところだった。

こんなんじゃないだめだ。大学に入ったらもう『腐れ縁』を返上しようと思つてたのに、これじゃあ逆じゃないか。

自分に湯を入れて、キツと温井に立ち向かう。

「だめだめ！ とにかくだめ！ 僕は行かないぞ。行くなら一人で行つてくれ。もう中学の頃とは違うんだからな！」

よし言つた！ 自分で自分を褒めてあげたい。

爽やかな達成感に包まれかけた僕だったが、目の前の温井の体全体から、まるで冷氣のような凍えたオーラが立ち上つてくることに気づいた。

あ、やっぱ無理？

タラリと背中に流れた汗は、一瞬にして冷たくなる。

「ふうん……へ〜え……じゃあ、あのこと、言つてもいいんだ。みんなに言つちやおうかな〜大声で」

俯きながら小声で呟く温井に、僕の汗は増えていく。

「お、おい。温井」

ヒョオオ、と風の音のような幻聴まで聞こえてくる。

温井は満面の笑みを浮かべ、口を開いた。

「皆さ〜ん！ ここにいる御手洗みたらい隆史くんは、私、温井泉の裸をムガツ、ムムム〜ッ！」

「わかつた！ わかつたからそれ以上言うな！ こんなオンボロアパートで叫ばれたら全部筒抜けなんだよっ！ 温泉でもどこへでも行つてやるから、黙つてくれ！」

僕はまだ続けようとする温井の口を両手で塞いで、やけくそで叫

んだ。

チーン。ご愁傷様、自分。

やはり大学生になろうと何だろうと、この温泉泉から逃れるのは
かなわないらしい。

無駄な努力、万歳。

白旗を上げた僕を満足げに見つめる温泉。

その笑顔はあの日、あの時、あの場所で浮かべたものと全く同じ
ものだった。

こうして僕の週末、湯けむり旅情二時間ドラマ、ならぬ二人旅は
幕を開けたのだった。

に、目指すは秘境の温泉宿。

一時間後、僕らは新幹線のグリーン車内に並んで座っていた。

新幹線なんて、高校の修学旅行で京都に行った時ぐらいしか乗ったことのない僕にとっては未だ未知の空間だったのに、加えてグリーン車とは。記憶にあった普通車の中よりもゆったりとした空間と上質の座席に、なんとなく落ち着かない僕に気づいたように、温井が笑った。

「どうしたの？ 交通費のことならもう気にしなくていいって言っただでしょ？ 強引に付いてきてもらうんだから、こっちが払うのが当たり前だし、それにどうせパパ持ちだもん。心配しなくていいんだよ？」

そうだった、そうだった。温井パパは会社経営、いわゆる社長さんで、プラス温井ママの実家も代々続く田舎の大地主とか何とかで、リッチな家系なんだった。それで確かパパは婿養子に入ったとか何とか言ってたっけ。まあほとんど名字を受け継ぐためだけだったみたいだけど。

ん？ っていうかこんだけリッチなら富士の湯の入浴料無料券なんて大した魅力じゃないような気がするけど。なんでわざわざ毎日僕を起こすなんて面倒くさいこと引き受けたんだろ、こいつはうーん、でも意外と無駄遣いはしてないみたいだし、わりとキツチリ節約してるからなのか。とにかくこいつの金銭感覚と自分のそれを比べること自体が空しい努力だ。まあ、気にせずありがたく恩恵にあやかろう。もともと興味もわかない温泉に無理やりついて行かされるんだし、それぐらいはしてもらわないとな。

「いや、そういうわけじゃなくてさ……」

適当ににごした僕の前で、温井は嬉しげに例の温泉宿のパンフレットを広げている。

もう僕のことから思考は離れたらしい。こいつのこういう切り替えの早いところがたまに羨ましくなったりして。

「で、京都駅からどれくらいなの？」

「なんだか手持ち無沙汰で訊ねると、温井は少しふくれた顔で振り向いた。」

「もうさつきも言ったじゃない。駅からバス二つ乗り継いで二時間くらいだって」

「え、言ってたっけ？ 結構遠いんだな〜それで停留所からは近いの？」

僕の二度目の質問にもまた温井はあきれたような顔をする。

「だから、停留所から三十分ほど山登ったところあるって言ったじゃん！ 全然聞いてないんだから！ 隆史くん、その人の話ちゃんと聞かないとこ、直したほうがいいよ？」

「あ、そうだったっけ？ ごめんごめん」

「って何で謝ってたんだ、僕は。もっともらしく説教されてるけど、なんか納得行かないような……。」

「ちょっと首を傾げる僕の内心には全く気づいていないのか、温井はすっかり機嫌を直したらしい。」

「足元に置いていた旅行カバンからスーパーの袋を取り出すと、お茶にジュースにお菓子にバナナ、などなど順番にテールに並べていく。最後に雑誌を置いてから、温井は笑顔で僕を見た。」

「ん？ なんか得意げな目してるし。」

「ハイ、どーぞ！ ささ、好きなのを召し上げれ。雑誌も読んでいいよ。隆史くん用のも買ったから」

「そう言っただけで温井が差し出したのはキャベツクラブ。言うまでもない有名料理雑誌だ。時々興味のある号は買っていることをしっかりと知っているらしい温井は、褒めて褒めて、という顔で笑っている。」

「しかも今回は『先取り！ 夏バテ撃退厳選レシピ』で、実は結構チェックしておきたかったんだよな。」

「なんだかんだ言いつつ、しっかりと懐柔されていることが悔しいよ。」

うな情けないような気もするけど、まあいいや。好意は素直に受け取っておこう。

「あ、ありがとう」

「いいえ、どーいたしまして！ 何せ遠いからねーま、秘境の宿だから仕方ないけど。長旅だし、楽しんで行こうね」

満面の笑みで覗き込まれて、僕は頷く。

こういうストレートなところが温井の良さかも、なんて思ったりしてる自分に軽く突っ込んでおくべきかだろうか。

だってさ、こんだけ嬉しそうに笑われたら……こんなのもたまにはいいような気がしてきちゃうじゃないか。

おいおい、ただだけお人好しなんだ、御手洗隆史。そんなんだから腐れ縁も五年目に入っちゃうんだぞ。すっかりしろ、すっかり！ 大学に入ったらこいつに振り回されるのも終わりにしようと誓ったはずだろー！

心の中でポカスカと自分を殴る僕のことなど、隣で鼻歌まじりに雑誌を読み始めた温井には見えてもいないようだった。表紙に躍る文字はやっぱり『特集！ 秘境の温泉宿』である。パンフレットは読み尽くしたらしく、続いてまた温泉紹介のページでも読んでいるらしい。

……つくづく好きなんだなー温泉。

東京から京都まで新幹線で大体二時間二十分。そこからバスと歩きで二時間半ってことは、ほとんど五時間だから チェックインする頃にはもう夕食時ってわけだ。それだけの長旅を苦にしないくらい行きたいってんだから、よっぽど評判の温泉なんだろうな。

僕みたいに風呂なんて体さえ洗えばいいって人間からすると不思議なほどの情熱だけど、まあそこまでのいい温泉なら、話題のネタにはなるかもな。

温井がテーブルに置いたパンフレットをちらりと盗み見る。

『女神山温泉 秘境の御宿、女神旅館へようこそ』 女神山温

泉？ 京都に女神山なんてあるんだ。女神旅館ねえ、そのまんまの

ネーミングだな。ちょっとは捻れよ、なんつって。

一人ツッコミした手前なんだか気恥ずかしくて、僕はなんとなくパンフレットを手に取る。中身は普通の温泉紹介で、とにかくのんびりゆったり過ごせますってことらしい。別段どこが普通の温泉と違うのか僕にはよくわからない。テーブルに戻そうと裏返してからふと見えた文字に、僕の目は止まった。

『女神旅館近くの観光スポット　女神神社、女神洞窟、温井滝』と書いてある。最後のこれは、温井と同じ名前じゃないか、なんてついつい感心しちゃったりして。まあどうということもない滝なんだろうけどさ。

温井に訊ねてみようかとも思ったけど、今邪魔しないでっオーラがやんわりと出てるのが見てとれて、僕は結局パンフレットを置いて、キャベツクラブを手に取ってみた。

しかしこれから温井と温泉旅館があ。なんだか不思議だな。まさか自分が女の子と二人で旅行するなんて、考えてもみなかった。

……女の子って言っても、温井だけだな。

チラ見した先で、温井は変わらず雑誌を読みふけている。サラっとしたショートボブが、午後の日差しで明るく光っている。

……温井も、いつの間にか女っぽくなったよな。

こんなにまじまじと眺めるのは久々というか、実は初めてかもしれない。

いつつも起こしに来たり、富士の湯で顔を合わせたり、はたまたなんだかんだと用事を頼まれたりして会っているものの、それは全部『腐れ縁』の温井であって、あまり異性だとは思ったことがなかったから、おかしな気分だ。いや、初っ端は確かに『女の子』として見たんだっただ。しっかりと、見てしまった。そう、こいつの素っ裸を。

まだまだ初々しい少女のものであったとはいえ、あの頃の自分には刺激が強すぎた。衝撃で鼻血を吹いてしまって、それからしばらくはフラッシュバックして大変だった。温井にはとんでもない目に

合わされるし、口止め料としての『腐れ縁』が始ってしまった理由にもなった。

って言っても、それだけが理由じゃないんだけど……。

温井の横顔を盗み見ながらぼんやりと思いついて出しているうちに、無意識に視線はあの頃より成長した胸元やら、ミニのスカートから覗く白い太ももなんかに移ってしまつて、僕は慌てて目をそらした。

イカンイカン。何をやってんだ、僕は。

想像なんかしてないぞ。ああ、断じて。あの時の鮮やかな映像と、目の前の温井の体を比べて、今のあれやこれやなんか、決して想像してたりなんか。

「隆史くん？　どうかした？　顔、赤いよ」

ふと目が合つて、あせつてぶんぶん首を振る。いやいやいや、なんでこういう時だけ気づくんのだ。

「何でもないよ、何でも。なんか暑いなー空調壊れてんじゃないか？」

変に裏返りそうになった声でごまかす僕に、温井は首を傾げた。

「そう？　私はちょっと冷えるぐらいだけど」

「じゃあ、僕のシャツ貸してやるよ。膝んどこにでもかけとけば」

Tシャツの上にはおっていたデニムのシャツを有無を言わせず温井に手渡す。

そうだ、この露出がいけないんだ。僕だつて一応健全な成人男子なわけだから、いくら相手が腐れ縁の温井であろうと、太ももなんて見てしまつからいけないんだ。

僕の不純な親切にちょっと意外そうな顔をしつつも、温井は微笑んだ。

「ありがとう。ちょっと皺くちやだけど使わせてもらつとく。本当は頼めばブランケット借りれるんだけど、隆史くんのシャツ借りれるなんて貴重な機会だしね」

「うるさいな、どうせ万年ジャージだよ」

冗談めかして言う温井に、僕は表面上ふてくされて見せる。いい

具合にごまかせたのにほつとしたりしてゐることは温井には内緒だ。

それにさつきジャージのまま出かけようとしたのを無理やり止められて、なんとか探した唯一まともな（あくまで僕のワードローブの中でだけ）外出着であるシャツは、貴重なことは本当だったから。

それでもデニムのシャツに青いTシャツ、そしてジーンズといういでたちは、温井に言わせるとかなりファッションセンス皆無らしいけど。仕方ないじゃないか、僕にとってはセンスよりも着心地だ。何やら雑誌に載つていそうな服装に身を包んでいる今時の女子大生、温井とはその点では気が合いそうもない。

「隆史くんもさーもうちょっとそのファッションセンスとボサボサ髪をなんとかして、いっつも眠そうなぼーとした目つきをスッキリさせてさ、あともう少し肉つけてガタイをよくしたら、見れないこともないのに。細すぎて吹いたら風に飛ばされそうだもんね。」

僕の考えていたことを読んだかのようなタイミングで、温井が笑う。対する僕は苦笑いだ。

「それって結局全部否定してる気がするんだけど。いいよ別に、太れない体質だし、低血圧でいつも眠いのは本当だし。どうせイケメンになんてなれっこないから、あきらめてるよ。それに温井は別に太くないだろ。細くもないけど 標準体型？ 身長も体重もちょうどいい感じじゃないの？」

「えーっと……一応褒め言葉として受け取っとくね。そういう飾らないところが隆史くんのいいところだし」

今度は温井が苦笑いして、そう続けた。

あれ？ なんか変なこと言っただけ？

んー……だけど、正直僕よりも肉付きがいいのは事実だから、これ以上どう言えればいいのかは僕にはお手上げだ。

「あのさ……その雑誌にも女神山温泉とやらは載ってるの？」

なんだか失敗してしまったようなので、僕は話題を変えるべく質

問してみた。本当は別にどうでもよかつたんだけど。温井は途端に嬉しそうな顔になって、顔を上げる。

「それがね、女神山温泉はメディアではとりあげられたことないの。たぶん旅館側が取材拒否してるんだろうけど、ネットでこっそり話題になっててね。まさに口コミだけって言うか……こういうのが本物の秘境の温泉だよね！」

とりあえずうまくご機嫌になってくれたことにほっとして、僕は相槌をうつ。

「ずーっとして行ってみたかつたんだけど、いつも予約いっぱいだね。日帰り入浴はお断りだし、指くわえて見てただけだよ。それが最近ネットでこうやってご招待して書いてあったから、もう頑張つてクイズに答えて応募したんだ。そしたら見事当選！ もう気分は最高、パラダイスだよ！」

そういう台詞は行ってみてからにしたほうがいいんじゃないか、とか余計なことは今は言わないでおこう。それくらいのデリカシーは僕にだってある。

「……それにしてもクイズなんてあつたんだ。それってやっぱ温泉カルト問題とかそういうの？」

無難な言葉を返した僕に、温井はふふん、と笑って頷いた。

「ピンポン。例えば全国の有名な温泉地の場所だとか、それぞれの効能だとか、はたまたおすすめのスーパージェットとか、設備だとか、とにかく全般的なクイズよ。この温泉さまにかかつちゃあ、目をつぶつても答えられるような問題だったけどね。案の定、見事成績優秀者の上位二名に入つたってメールで当選の連絡が来たつてわけ。ね、すごいでしょ？」

「ふーん。そりゃあすごいもんだね」

僕の返事が相当棒読みだったことには全然気づかなかつたらしい温井は、嬉しそくににんまりしてからまた雑誌に視線を移した。うーん、まだまだ貪欲に温泉研究中ってわけだ。完全に趣味の範疇を超えてるような気がするんだけど、温泉学でも学べばいいのにな

んで文学部になんて入ったんだろっ、こいつは。

それにしてもそんだけ口コミで話題の秘境宿とやらが、どうしてわざわざ無料ご招待なんてやってるんだ。そもそも秘境の温泉ってやつは、ひっそりと来る客だけ迎えてりゃいいんじゃないんだろっか。やっぱいくら秘境の温泉でも営業しなきゃやってけないってことだろうな。うんうん、それだけまだまだ不景気だっただけか。じくさい結論に落ち着いた僕は、キャベツクラブの魅力的なレシピ写真に目を奪われ、素朴な疑問は放棄した。無料ほど怖いものはない。なんていうじいちゃんの口癖が浮かんだけど、オクラと山芋のごま酢和えの作り方に脳内の居場所を占領され、ひっそりと消え去って行くのだった。

さん、温井と僕と、烏と看板。

「温井……もう、そろそろいいだろ？」

「だ、だめだよ、隆史くん……まだ、心の準備が」

「いや、こういうのは思いきりが大事なんだよ。ずっと待ってたんだ。もう我慢できない。いいだろ？」

「いやっ、隆史くん、待って！」

少し潤んだ瞳で必死に見上げてくる温井の制止を無視して、僕はついに大きく息を吸った。

そして決めた。ここは男の僕が勇気を持ってやるべきだと。

「温井」

まだイヤイヤをするように首を振る温井の肩を両手で掴み、僕は温井の赤い顔に自分の顔を近づけた！

「温井……僕ら、道に迷ってる」

「いやーっ！ 言わないでって言ったのに！」

途端に絶望が色濃く温井の顔を覆っていく。両手で頭を抱えて、温井は地面にしゃがみこんでしまった。

カア、と頭上で烏が一鳴きし、かなり薄暗くなってきた空へ飛んでいく。

「だって、歩き続けてもう一時間だぜ？ いくら歩いても看板の一つも見えないし、それにさっきからなんだかぐるぐると同じとこ回ってるような」

何がバス停留所から三十分だ。温泉の看板どころか、人っ子一人いやきつねっ子一匹だって通りやしない。それどころか山道はほとんど登頂不可能なほどに荒れていくし、獣道ですらないほどにあちこちから木の枝は突き出てるわ、足元の草は背丈が高すぎるわ、鬱蒼と木々が生い茂ってるわ、あきらかにこれは、例の二文字が浮かんでくる。

「考えないようにしてたのに、これって、これってやっぱり遭難

！？　そんなのやだよ、パパ、ママ　！」
うわああん、と子供のように泣き始めた温井に、僕は思わずあつ
けにとられ、ポカンと口を開けてしまった。京都駅のトイレでしっ
かりと着替えた温井の山道用らしいジーンズとピンクのスニーカー
が既に薄汚れている。妙に準備万端で、ちゃっかりしているかと思
つたら、突然泣き崩れるんだから、全く読めない奴だ。
ずっと前にも一度だけ見たことある泣き顔　　そう、あれは僕に
全裸を見られた直後だ。

鼻血でぶっ倒れた僕は気がついたら番台の脇の床に寝かされてい
て、目を開けたらじいちゃんのがのっそり覗き込んでいて、その隣で
温井が泣きじゃくっていた。表向きそれは痴漢にあつたシヨックを
理由にしていたけれど、本当の理由は僕だ。もちろんただの顔見知
りのクラスメイトに自分の裸をさらしてしまったことが一つと、そ
してもう一つは　　。

えぐえぐとしゃくりあげている顔を見下ろしながら、僕は前言撤回
を誓っていた。大人っぽくなったな、つてのは、まだまだ時期尚
早だったらしい。僕はどこかほっとしたようなおかしな気分で一息
つくと、雑草に埋もれて泣き続ける温井の向かいにしゃがみこんだ。
「温井、まだ遭難って決まったわけじゃないんだし」

「そうだよ、絶対にそうに決まってる！　だって携帯も圏外だし、
人もいないし、どうしたらいいって言うの？　あああ、私たちここ
で骨になるんだわー誰にも見つけれられず、ひっそりと草に覆われて
無縁仏になるのよー！」

「いやいや、どっかの樹海じゃないんだからさ」
思わず吹いた僕を、温井がキツと睨んでくる。真つ赤な目と鼻じ
や、迫力ゼロなんだけどね。

「どうしてそんな冷静なの？　隆史くんっていつつも変に冷めてる
し、テンション低いけどさ、私を馬鹿にしてるわけ？　どうせ私は
ここ一番に弱いわよっ！　ひよろひよろしてるくせに実は体力ある
隆史くんとは違ってもう山歩きも限界よっ！　なんで息も乱れてな

いの、なんで平気な顔してんの、なんで遭難しかかってんのに落ちて着いてんのよ！ そのタレ目で人を馬鹿にしてんでしょ？ いいわ、思う存分馬鹿にするがいいわつ。えーん、御手洗隆史のバカヤロー！

言いたい放題叫んで、どつと泣き伏す温井。言いがかりだ。やつあたりだ。アンドさりげない差別だ。

被害者度百パーセントな自分に同情しつつも、とりあえずパニツク状態の温井に何を言っても無駄だと判断した僕は、「そんなことないよ」と短く返答してみた。

案の定その回答が不満だったらしく、温井はまるで全責任が僕にあると言わんばかりの恨みがましい目を向けてくる。

「嘘つ、絶対嘘に決まってる！ 散々歩き回ってる時だつて本当は鼻で笑つてたんでしょ？ 気づいてたんならもつと早く言つてくれればよかつたじゃない！ そしたらこんな奥まで迷い込まなかつたかもしれないのに……」

「さくさく進んでつたのはそつちだろ？ てつきり旅館から地図でも送ってもらつてたのになつて思つてたからさ、途中までは」

「そんなのないわよーだつて停留所から一本道だつて書いてたんだもん。それなのに段々道幅狭くなるし、荒れていくし、あせるじゃない。私が連れて来といてまさか迷つたなんて言えないし、必死で挽回しようとしてたんだもん。バス降りた時から携帯は圏外だし、他にどうしろつて言うのよー」

「まあまあ、冬でもないし、そんな高い山でもないんだし、なんとかなるつて。とりあえず水でも飲んで、リラックス、リラックス。コップ一杯の水は心を落ち着かせてくれるんだつてさ」

言つて背負つていたりユックからペットボトルの水を出して、手渡ししてやる。温井は赤い目で、それでも素直に受け取つた。

「特に十度C前後の水は味覚神経の酸味を刺激して、脳に合図を送るらしいよ。酸味には緊張を和らげる効果があつて、その結果落ち着いた気分になるつて仕組み」

「……生ぬるい」

調子よく説明を続けていた僕をじとつと見つめて、温井が呟いた。若干困った空気を仕切りなおすべく、僕は辺りを見回し、立ちほだかる木々を指で示した。

「いや、それにしても立派な木々だよな。森林浴にちょうどいいよ。ホラ、フィトンチッドの効果ってよく言うだろ？」

なるべくトーンを落とさないように、僕は頑張って笑いかけてみる。温井も笑い返す。かと思いきや、ものすごく冷やかな目で僕を見上げた。

「何よそのなんとかチッドって」

「え、だから、フィトンチッドだよ。もとはロシア語で、フィトンは『植物』、チッドは『殺す』って意味でさ、日本語で解釈すれば植物の持つてる殺菌作用を意味してるんだよ。スギとかヒノキとかの低地の森林にはテンペル系の芳香物質がたくさん含まれててさ、それがいわゆる森のいい香りなわけ。森林浴をすると癒し作用があるってのは有名だろ？ それがこのフィトンチッドの効果ってやつで、いい香りに癒され、さらには殺菌効果で免疫力が強化されるととにかくストレス解消には最適な場所にいるわけだよ、僕らは。だからポジティブに考えて　って……あれ？　なんか変なこと言った？」

話してるうちにどんどん温井の目つきが鋭くなっていたのは気のせいではなかったらしい。思いつきり『無理』だと無言で告げている温井に、僕は首を傾げ、ポリポリと額をかく。

「えーっと……じゃあさ、あ、夕日。朝日はまぶしいのに、夕日はまぶしくない理由知ってる？」

「知るわけないでしょ」

「朝日も夕日も天気がよければ同じ明るさだから、問題は目のほうなんだ。朝日は夜の暗さに対応するために瞳孔が開いていた目に飛び込んでくるからまぶしいと感じる。でも夕日は昼間の明るさに対応して既に瞳孔が小さくなってから、光が飛び込んできてもまぶ

しくはないってわけだ。どう？ 面白いだろ？ さあ、そうとわかれば心置きなく夕日の美しさに見惚れ

「られるわけないでしょっ、このウンチク馬鹿！」

「あでっ」

スコーン、と気持ちのいい音が響き渡った。 ような気がするほど、温井は持ってたペットボトルを僕の頭に思いっきり打ち下ろした。

「そんなくだらないウンチク聞いている場合じゃないのよー！ もう日が暮れそうだったのに、こんな状況で誰がぼさつと夕日を眺められるってのっ！」

まさに噛み付かれそうな勢いで言い放たれて、僕は自分で自分の頭を撫でながら笑った。

「いや、少しは元気が出るかなと思って」

「出るわけないでしょーがっ！」

鼻息も荒く吼えると、温井はさっきまでのうなだれた様子はどこへやら、足元を邪魔する草たちを払いのけながら歩いて行く。

多少なりとも自分の試みが成功したことはその足取りからも見てとれる気がしたけども、一応口に出すのはやめておいた。 まあ、うじうじ泣いてるより、温井はやっぱりあれぐらいのほうが頼もしい。「えーっと、どこ行くの？」

「わかんないわよっ、だけどここでじっとしてたって仕方ないじゃない」

そっとう追いついて声をかけたら、温井はそのままのテンションであっさり言い返した。

「それに、温泉が待ってると思ったら、むざむざとあきらめるわけにはいかない！ 行くよっ、隆史くん！」

うーん、熱いな。温泉が絡んだ温井に勝てる奴は誰もいないとつくづく思う。 いや、ホント。

僕より頭一つは余裕で低い相手を追いかけて、草むらを進む。

さっきはああ言っただけど、春とは言っても山じゃまだまだ夜は寒

い。沈みかけてる太陽を見ながら、僕はそろそろ困り始めていた。自分とはかくとして、女の温井に野宿をさせるのも忍びない。いくら連れてこられたとは行っても、僕だって男だから、さすがに風邪でも引かせてしまったては温井の両親に申し訳がたたないな、とか思うわけだ。

「温井、とりあえずこれ着て」

さつき新幹線の中でも活躍したデニムのシャツを脱ぎ、僕は再び温井に差し出した。少し身震いしているのを見てしまったのだ。

「隆史くん……ありがと」

温井はちよつと驚いた顔をして、少し恥ずかしそうに袖を通した。ちよつとは男気を出せたかと微笑んだ途端、ふと吹いてきた肌寒い風に僕はくしゃみを連発。

目が合った温井は、今度はいつもの笑顔で吹きだしてくれた。それでもどんだん暗くなってくる周囲を不安げに見渡し、温井は少し僕の近くに身を寄せた。

「どうしよう……本当に日が暮れちゃうね」

「うーん、とりあえずさっきのバス停のあたりまで下りられれば、民家にも頼れるんだけど」

そんな会話を続けながら、なんとか道を探す僕らを、山の夜は無情にも包み込んでくる。さすがにあせってきた僕が歩みを速めようとしたその時、温井が草に足をとられたのか、つまずいた。

「大丈夫？」

しゃがんで訊ねると、温井は疲れた顔で笑った。

「あはは、そろそろ例の禁断症状が出てきたみたい。今日はいつもより余計に体力使っちゃったから……」

「あ、そっか。そうだよな　ごめん、気づかなくて」

「そんな、謝らなくていいよ。別に隆史くんが悪いんじゃないし。本当、困った体質だよな。昨日浮かれすぎてシャワーで済ましちゃった私が悪いんだ。お風呂に入っとけばここまで早く出てくることもなかったと思うんだけど」

温井の言う、困った体质　まさにそれこそが僕らの『腐れ縁』の元凶にほかならないもの。あの日、あの時、富士の湯で見てしまった、温井の真実の姿。それは単に裸のことだけではなく　おそろくこの世界で他に類も見ないであろう、奇跡の体質のことだ。柔道有段者でも何でもない普通の女の子である温井が、痴漢をぶん投げることのできるほどの。

「……とにかく、早く旅館を探そう。風呂に入れば、戻るんだろ？」

「　うん。ごめんね、隆史くん」

「　いいよ。気にすんな。ホラ」

おぶされ、と無言で近づけた背中に、温井は本当に限界だったらしく、素直に掴まってきた。こういう姿を見せられちゃうと、ついついほつとけなくなるというか、冷たくできないというか……要するにいいように使われちゃういつものパターンってわけなんだけど。今の温井はなんだかんだで面倒なことを頼んだりする時とは違って、本気で悪いと思っっているようだったから、僕はかえって気が引けるような、変な気持ちで温井を背負って歩いた。

そう、あの日初めて温井の裸を見てしまった僕が、鼻血を吹いた赤っ恥を誰にも話さないでいる代わりに、温井が提示した条件それが、こいつの特異な『体质』を秘密にすること、そして出来る限りの協力を惜しまないこと、だったってわけで。僕は今までこの秘密と約束に縛られ、半ば強制的に『腐れ縁』の付き合いを強いられてきた。段々度を越してきた温井のお願いに、僕だって許容量オーバー気味で怒ってたはずなんだけど　弱ってる温井を見ると結局このザマだ。

まあ、いいや。目指せ、女神旅館。早くこいつを風呂に入れてやるのが、今の僕の使命だ。

温井泉　定期的に湯に浸からないと、体調不良を起こす世にも珍しい女。そしてひとたび温泉に入れば、その間は知力、体力共に人並み以上のスーパーウーマンに変身してしまう凄まじい女。なんて厄介で不思議な僕の『腐れ縁』な温井を今、助けてやれるのは僕

しかない。

気合を入れて、メガネの中から強く前を見据えた僕は、ふと後ろを振り向いて見えたものに、目を瞠った。

「アレ？」

今の今まで木々に囲まれて見えにくかった視界の中、暗くなるにつれて何かが光っているのが浮かび上がってきたのだ。キラキラと点滅を繰り返すオレンジ色の光は、確かに人工的なものに間違いなく。

「温井、温井」

僕より視力のいい温井に見てもらおうと思っただ声に、反応はない。背中にぐったり感じる重みからして、眠ったのか、気を失ったのか　とにかく今は助けにならないことは確かだ。

あきらめて温井をおぶったまま、草むらを明かりの方に進んでいく。前にかけた自分のリュックと、腕にぶら下がる温井の旅行カバン、そして意識のない温井の体重に、さすがに汗がにじんでくる。何のこれしき、男は根性だ。いくら自分より重いかもしれない女の子を背負っていようが、ふらついてるなどみっともない。

頑張れ、隆史。それにちょっとトイレに行きたい、御手洗みたらいだけに。なんてアホな自虐ネタで自分を励ましつつ、本当に切羽詰った状況になってきた体を頑張っって操り、僕は進んだ。そしてついに見えたものに、僕は歓喜の声を上げた　心の中で。

期待も報われ、古びた趣のある旅館が木々の開けた場所に見えてきたのだ。オレンジ色の電飾に彩られた看板も堂々と謳っている

『秘境の御宿、女神旅館へようこそ』と。

って、オレンジ色の電飾　？

なにかが腑に落ちない気はしたけど、僕はもうそんなことにこだわっている状態ではなくて、急いでその看板の示す先、女神旅館へと足を踏み入れたのだった。

よん、お約束だよ、お部屋は一つ。

表のオレンジ電飾に感じた違和感は、旅館の中に入った時にはあつさりと吹き飛んでいた。

こんな山奥の秘境の宿だから、こじんまりした田舎くさい旅館なんじゃないかところそり思っていた僕の予想を見事に裏切り、女神旅館は意外にも老舗の高級感が漂う、しっとりとした雰囲気の宿だったのだ。

玄関先に出てきた女将らしき和服の上品なおばさんは、僕の顔（というよりもおそらく背中）の温井と荷物のサンドイッチ状態（を見）て驚いたようだったが、さすがにプロらしく笑顔を浮かべたまま、訊ねた。

「温井様でいらつしやいますね？」

無言のまま頷いた 正直腕も膝もブルブルで、ついでに生理的事情も限界で、話す余裕ゼロだった 僕に、女将は深々とお辞儀をして「ようこそおいでくださいました。お待ちしておりました」と微笑むと、すぐに出てきた数人の仲居さんたちに指示を出す。あわてて荷物を持ってくれる彼女たちだったが、さすがに意識を失った温井は僕が背負っていくしかなかったため、そのままおんぶ状態で僕は部屋へと案内されることになった。

立派な壺やら生け花なんかを眺めつつ、仲居さんに誘われるまこたまに赤絨毯の上を歩いて行く。平屋だけど、コの字型になっているように、ずっと向こうまで部屋が並んでいるようだった。

「お待ちせいたしました。本日温井様にご宿泊いただきます、椿の間でございます」

三部屋くらい通り過ぎたところで止まった仲居さんが、そう言つて襖を開けてくれる。荷物も置いて、ついでに気を失ってる温井のために布団まで敷いてくれるというテキパキぶりだ。

「あ、どうもご丁寧……」

やっと温井を布団に寝かせて、なんとか話せるくらいには回復した僕がお辞儀をすると、仲居さんは既にセットしてあった湯のみでお茶まで出してくれた。

「これからご夕食をお持ちいたします。その後に、女将がご挨拶に参りますので、どうぞ、ごゆっくりとおくつろぎくださいませ」

完璧な歓待ぶりに僕はちよつと感激しながらまたお礼を言った。

そして仲居さんが去ると同時に急いでトイレへ向かう。ああ、よかった、部屋についてて。

ユニットバスまであるバスルームに感動し、すつきり気分で用を足してから、僕は生まれ変わった気持ちでお茶を片手に部屋を見渡した。落ち着いた赤を基調にした和なお部屋は結構広々としていて、畳の部屋の向こう側には大きな窓があり、丸テーブルと椅子が置かれ、休めるようになってる。

テレビとテーブルが置かれたこの部屋の隣り、襖を開けたスペースは寝室になっていて、温井は並べられた布団の片側ですうすうと寝息を立てていた。そろそろ起こしてやらないとな、先に温泉に入れてやるか、それとも夕食が先かな。　　ってアレ　　ッ!?

「……部屋！　　ひっ、一部屋!?!　　ふ、布団……並んじゃってるし……!」

僕は先ほどまでのくつろぎ感はどこへやら、飛び起きて叫んでいた。ガタンと足が当たったテーブルが揺れて、飲みかけの香ばしいほうじ茶がこぼれる。あわあわとふきんを探し、見つからずにティッシュを探し、それも見つからずにあせった拳句に僕は置いてあった新聞で拭いた。濡れた新聞の捨て先を求め、今度はくずかごを探して部屋をうろつき、寝室の隅に見つけてやっと新聞を捨てる。そして枕元にティッシュの箱を発見して、「なんだ、こんなところにティッシュあるじゃんか……」と呟く僕。

おいおい、こんな近くにあるのに見つからないってどれだけバニクってんだ、自分。

まったく、あわてんぼうさん　　って、ん?

し、寢室にティツシュって……ティツシュって……！！

まさにガーン！ という効果音が似合いそうなほど青ざめていた
だろう僕は、仲良く二組並べられた布団から思いつきり遠ざかりな
がら、温井を呼んだ。

「ぬ、温井……っ！ お、起きてくれ！ へっ、部屋が……」

一部屋なんだけど！ と僕がまさに叫ぼうとした、その瞬間だっ
た。

今の今まで熟睡していたとは思えない勢いで温井ががばっと起き
上がり、僕の腕をつかんだのだ。

「ひいっ」

思わず変な声を上げた僕のことなど気にせず、温井は立ち上がっ
た。

「温泉！」

唐突に叫び、部屋を見渡した温井は、自分の旅行カバンを視界に
捉えるや否や、中からすごい勢いで水玉模様のビニールバッグを取
り出し、風のように部屋から飛び出して行ったのだ。

「お、おーい……」

僕がおそろおそろ廊下まで見に行った頃には時すでに遅し。

温井の姿は影も形もなかった。

おそらく最後の力で温泉に向かったんだろう っでとんだけ必
死なんだ、おい。

ため息をつき、とりあえず部屋に戻る。

な、なんか、一部屋だつてことであんだけあわてちゃった自分が
急に恥ずかしくなっちゃうじゃないか。

そりゃあカップルご招待つてんだから、旅館側は一部屋だと勘違
いするのも無理はない。温井が話を通しとくのを忘れたんだろう。

あれだけ温泉しか目に入ってないぐらい舞い上がってるんだから、
きつとこの状況にも気づかなかつたんだろうしな。

とにかく、早めに女将さんにも部屋をもう一つ用意してもらわ
なきゃ……と、僕が飲み干した湯飲みをテーブルに置いた瞬間。

「お待たせいたしました、ご夕食でございます」

まさにグッドタイミング。仲居さんが現れ、丁寧に二人分の夕食を運んでくれたのだ。

「あ、どうもありがとうございます。わーっ、うまそう」

目にも鮮やかな料理の数々に目を奪われ、つい歓声をあげてしま

う。

「へえ、地鶏鍋に山菜の天ぷら、お浸し、それに鮎の塩焼きかあ。

おっ、湯葉田楽！ さすが京都って感じだな」

「まあ、お料理にお詳しいんですね。珍しいですね、男性の方が」

「ええ、まあ……ちょっと好きなもので。あつ、黒豆豆腐！ これなんか結構珍しいですよ。わあ、無料ご招待でこんなレアなものいただけるなんて、ラッキーだなあ」

メガネ越しに目を凝らしておしながきと照らし合わせちゃったりしている僕に、仲居さんはくすつと笑った。

「そうですね、本当に今回は特別なご招待なんです。女将の提案で、お客様への感謝を込めて、本当に温泉が大好きな方に来ていただくというプレゼントでございます」

どうせ旅館のPRか何かだろうとか考えていたことはさておき、僕はニコニコしながら頭を下げていた。すみません、温泉好きは約一名だけなんですけど。でも料理好きだったことで許してください。なんていう不純な僕の笑顔をどう受け取ったのか、仲居さんはなおも微笑んでくれる。

「大好きな温泉に、大好きな方とゆっくり遊びに来ていただく、というプランですので、お部屋も極上のお部屋を用意させていただいたんですよ。どうぞごゆっくりとおくつろぎになってくださいませね」

ま、まぶしい……！ まぶしすぎる！

純粹すぎる好意の微笑。完璧な接客に僕は圧倒されていた。

し、しかも、大好きな温泉に大好きな方と、だなんて、二重の嘘もいとこだ。

言い出せるわけないじゃないかー!!

心の叫びはもちろん仲居さんに届くはずもなく、ちゃっかりお心付けたとかいって温泉に前もって渡されていた封筒まで渡しちゃったりして。

これじゃあ僕まで完全に普通の泊まり客じゃないかよ。

背後に敷かれた二対の布団が無言で何かを訴えている気がしたけれども、とりあえず僕は問題を後回しにすることにした。

うんうん、女将もあとで挨拶に来るとか言ってたし。その時でいいや、その時で。

「失礼いたします、女神旅館の女将でございます」

って来ちゃったよ、もう!

いきなりラスボス登場なんて、反則だろー!?

もちろんこちらもち心の待ったコールは通用するはずもなく、女将がにこやかにふすまを開けた。

「あら、お連れの方は……」

少し戸惑ったように一人きりの僕を見上げた女将に、僕は頭をかきながら笑う。

「あ、あの、先に温泉に入ってくるって……彼女、本当に温泉が好きなもので」

「まあ、それではお体の具合はもうよろしいんですね。よかったですわ」

そうだった、先ほどのぐったり状態じゃ心配もするわな。

それで挨拶にわざわざ来てくれたのか、とまたも老舗旅館の接客に感心しかけた僕に、女将はつつ、と近寄ってきた。

「もしかしたらご棄権なさるのかと、心配しておりましたのよ。レースはもうご夕食の後からでございますから、間に合って本当によかったですわ」

……キケン? レース?

なんのことでしょうか?

頭にハテナが飛び交っている僕に気づいているのか、いないのか、

女将はあくまで上品な微笑みを絶やさず、続けた。

「今度のレースは、温泉の知識だけではなく、恋人同士の愛の絆が試される、難易度の高いものとなっておりますので、どうぞお力を合わせて、ご健闘くださいませね。女神旅館一同、どちらが勝利なされるのか、大変楽しみにしておりますから」

ねっ、と力を込めて両手を握られ、僕の口はますますポカンと開きっぱなしだ。

女将は意味深な目つきで僕を見返すと、おしながきをゆっくりと裏返して見せる。

「こちらにもルールが書いてありますので、今一度ご確認くださいね。レースが始まってからのご棄権は認められず、その場合は相手の不戦勝になってしまいますから、ご注意を。あ、それからもう一つ……万が一、エントリー情報に嘘偽りがあった場合は、即刻失格の上、ペナルティをご用意させていただいておりますので」

「ペ、ペナルティ？」

思わず聞き返す僕に、女将はにんまりと笑う。

「ええ、それは……」

丁寧に化粧が施された赤い唇が、何やら恐ろしげに動こうとした、その時。

「大丈夫です！」

ときなり高い声がした。振り返ったそこにいたのは、頬を上気させた温井だった。

どうやらしつかり温泉で英気を養ってきたらしい。完全に元気を取り戻した顔で、部屋に入ってくる。

「ペナルティも何も、嘘偽りなんて絶対にありませんから。ねーっ？ 隆史？」

おいおい、呼び捨てだよ。

っていつか何の話だか僕にはもうチンプンカンプン……と女将に訊ねそうになった僕は、背筋に走った寒気に口を閉ざした。

いや、閉ざさざるを得ないほどの冷気たっぷりのすごい目線が温

井から発されているのは気のせい、じゃないよな。

「あ、え、えっと……うん」

ついに頷いた僕に温井は満足げな笑顔、そして女将は不思議な含み笑いを返し、僕は否応なくとんでもないことに自分が巻き込まれていくのを感じていたのだ。

や、やっぱり、来るんじゃないかった、ような気がする。

1、いきなりびっくり！ 温泉レース

カコーン。

静かなしおどしの音が、中庭から響く。

それよりも静かな、静かな部屋の中で、僕は温井と向かい合っていた。

「……温井さん。一体これは、どういうことなんでございましょうかね？ 確か、ただの温泉無料ご招待だと聞いていたような気がするんですけど、えーっとあれは僕の聞き違いだったのかなあ。それとも空耳……？ いやー困ったもんだ、大学生にしてボケちゃったのかなあ、僕は」

おしながきの裏側から目を離さずにボソリボソリと呟く僕の前で、温井がついに沈黙を破った。

「ごめん！！ ほんっとーにごめんなさい！ ねっ？ 謝るから、このとおり！ 許して？ ねっ？」

両手を顔の前で合わせて、温井がこれ以上ないくらいの愛想笑いを浮かべる。

「だってどうしても行きたかったんだもん！ こんなだって最初から言っていたら、隆史くん、付いてきてくれないでしょ？ カップルじゃなかったら応募資格がなかったから、仕方なかったの〜隆史くんには迷惑かけないように頑張るから、お願いだから一緒に参加して？」

「参加してって……この、『カップルで挑戦！ 愛の温泉レース』にかよ！？ しかも負けたほうは全額宿泊代負担ってどういうことだよ？ 無料ご招待は？ クイズで当選したってのも嘘だったのか？ 何が温泉でのんびりだよ、そんなくだらなないレース、誰が参加するか！ 大体僕は温泉のことなんか何にもわからないし、興味だつてないんだぞ？ どうやって何の問題に答えるって言うんだよ！ ぜったいたい、参加なんてしないからな！！」

僕の大声に、温井はかなり驚いた顔をして、固まっていた。それもそのはず、僕がこいつにこれだけ怒って怒鳴ったことなんてなかったのだから。

いつもテンションが低いとか、ぼーっとしてるとか散々言われてきたけれど、僕だって怒る時には怒るんだからな。急な誘いも、東京からの長旅も、山での苦労も、全部だまされて連れて来られていたってことが腹が立つ。僕はこんなくだらないレースだか何だかのために、こんな秘境の宿くんたりまで来たってのかよ。冗談じゃないってんだ。

鼻息も荒く睨みつけた僕を、温井はしばらくじーっと見つめていた。

しかし数秒後、その顔がゆがむ。泣くのか、と思いきや、あせった様子で僕にシーツと人差し指を示して見せたのだ。

「そんな大声で言ったらだめだってば！ 誰が聞いてるかわかんないんだから、ルール、ちゃんと見てなかったの？」

今度は僕のほうで啞然とする番だった。温井は押し殺した声でそう注意した挙句、そっと襖まで開けて、廊下を確認している。

ちょうどその時部屋の前を通り過ぎた人影に思わず二人であせったものの、そこにいたのは腰の曲がった掃除のおばあちゃんだった。女神旅館の手ぬぐいで白髪頭にほっかむりをし、デカイ瓶底メガネにマスクをしていて、表情まではわからないが、ほうきを杖のようにしてふらふら歩いている。

「あ、あのう……」

おそろおそろの話しかけた温井の声も聞こえなかったのか通り過ぎかけて、何度か呼んでやっと振り向いた。

「はい、何ですかいね？」

震えた声でゆっくりと訊ねる様子からも、全く僕らの話が聞こえた様子もなさそうだった。

それでようやく安心したのか、温井も何でもないとおばあちゃんを見送り、部屋へ戻ってくる。そのまま愛想笑いを忘れずに張り付

けて、僕を見上げた。

「隆史くんが怒るのも無理ないよ。レースのことを言わずに付いて来てもらったことは本当に悪かったと思ってる。ごめんね。でもネットでクイズに答えて当選したつてのは嘘じゃないよ。レースへの挑戦権がもらえたつてことなんだけど。レースに参加できるのは二組のカップルだけで、実は五年に一度開催されてる、秘密のレースなの。あ、秘密つて言ってもメディアなんかには出ないようにしてるだけで、温泉好きの間ではネットなんかで有名でさ……」

律儀に説明していく温井に、僕はつい相槌を打ちそうになって、あわててやめた。

またこいつのペースにはまってる場合かよ、御手洗隆史！ しっかりしろ、しっかり！

「そ、そんなことどうでもいいよ。とにかく僕はおりる。部屋も一部屋だつて言うし、そんなの泊まれないよ。温泉だつて別に興味ないし、入らなくていいからこのまま帰るよ」

怒った顔をキープするよう気をつけながら、僕は言い切った。

とりあえず夕食だけは沈黙の中食べ終えていたから、思い残すことはないつてもんだ。

本気で立ち上がり、荷物を取りに行こうとした僕に、温井は今度こそあわてたように追いつがった。

「なっ、何言ってるの、隆史くん！ 今からだなんて、日もすっかり暮れてるよ？ 山道なんて何も見えないし、第一もうバスだつてないじゃない！ 帰るなんて無理だよ！」

現実そのものの温井の言葉。僕も内心ではわかっていたんだけど、とりあえずそれぐらいの態度は見せておかなきゃつてことだ。

「じゃあ女将に事情を話して他の部屋を取ってもらおうよ。部屋がないなら外で野宿したつていい。とにかくこれ以上嘘ついて、こんなレースには参加できない。温井には悪いけど、どうしたつて気持ちには変わらないから」

メガネをしっかりと押し上げて、キツパリとそう言った僕に、かわ

いそうなくらいに温井は表情を変えた。僕がここまで断るとは思ってもみなかったんだろう。いくら『腐れ縁』とはいっても、僕にだってできることとできないことはある。こればかりはどれだけ説得したって変わらないんだからな。そうさ、男の意地ってものを見せ付けてやるんだ！

「……ねえ、隆史くん」

背後でかけられた声は真剣なものだった。

でもそこで負けるわけにはいかないと、僕は黙って自分のリュックを持ち、そのまま部屋を出て行くこうとした。

「隆史くん、待ってったら！」

だめだめ。ほだされないぞ。

「……腐れ縁、今日でやめるから！」

ほだされないっいたらほだされな……え？

思わず振り向いた僕を追いかけた温井は、今まで見たこともないくらい神妙な顔をして、僕を見ていた。いつもの余裕めいた態度は、これっぽっちも見当たらない。

瞬きもせずに僕を見つめたまま、温井は決意をしたように続けたのだ。

「隆史くんがこのままレースに参加してくれたら、もうこれを限りに『腐れ縁』は返上する。昔のことも、誰にも言わない。これからは無理なお願ひもしないし、隆史くんが迷惑だって言うんなら、もう起こしにも行かない。だから、お願い……最後にするから、レースと一緒に参加してください！ 私にとっては、夢だったレースなの……！」

カコーン。

何度目かのししおどしの音が響く。

けれど、部屋の静けさは、今までとは確かに空気が変わっていた。

「温井……」

そんなにやりたいのか。

必死な顔で、なりふりかまわず、五年目の『腐れ縁』を返上する

くらいの覚悟で。

温泉好きの夢だっというのかよ。

こんなくだらない、何だかよくわからないレースが？

「隆史くん？」

不安げな声で呼ぶなよ。

そんな顔で……見ないでくれよ。

「わかったよ」

結局、こうなっちゃうじゃないか。

ついに答えた僕を見て、温井の顔はパアッと明るくなる。

本当に嬉しそうに手を叩いて、僕に駆け寄る。

「ありがとう！ 本当にありがとう、隆史くん！」

何度も何度もそう言っつて、手を握られて、笑われて 僕はいつ

ものように頷いてしまっつ。

でもこれが最後だから。

ずっと縛られてた『腐れ縁』から解放されるから。

……温泉レースでも何でも、参加してやろうじゃないか！

時刻は夜、八時半。

秘境のお宿、女神旅館。

こうして僕と温井の温泉レース参加が決まった。

ルール：温泉が好きなら、愛し合う恋人同士が協力して、温泉カルト問題に答え、ゴールを目指す。優勝したカップルには温泉好きの温泉好きに寄る、温泉好きのためのトロフィーと盾、そして翌年の無料ご招待券がプレゼントされる。

って賞金も何もないのかよ！

僕の心のツツコミに込めるように、ししおどしが相槌を打った。

ろく、早速登場、最強ライバル！？

時刻は午後八時半。山の夜はとっぷり更けて、旅館以外は暗闇に包まれている。

静か過ぎるほどの静けさの中、僕と温井は女神旅館の大広間へとやって来ていた。

その表情は真剣そのもの。震える手で襖にそつと手をかけようとする温井に、僕は安心させるように笑ってやった。

「大丈夫だよ、温井。たかだか温泉カルト問題だろ？ お前のマニア度は僕が保証する！ きつと勝てるさ」

「隆史くん……あ、ありがとう」

僕の優しい言葉に、温井は嬉しそうに表情をゆるめる。更に頷いてやりながら、僕は言った。

「なあ、それはいいけど……なんでわざわざ浴衣なんだ？」

そう、僕たちは揃いも揃って浴衣。もちろん例の温泉旅館に必ず置いてある旅館の名前の入った渋いやつだ。に身を包み、着慣れていない僕は、足元がスカスカしてなんとも落ち着かない気分なのだ。

「わざわざ……温泉といえば浴衣！ 浴衣は温泉好きの正装とも言える大事なものよ？ 温泉好きの最高峰であるこのレースに参加するにふさわしいものはこれしかないでしょう！」

当然のように言つてのける温井のテンションの高さに僕はちよつと引きつつも、なんとか「ふうん」と相槌を打つことには成功した。そうか、このレース、温泉好きの最高峰だったのか。

本当かよ、なんてツツコミはまさしく禁句。まあいいや、どうせそんなの僕には関係ないことだ。ただでさえ温泉に興味もないのに、レースなんてもっとどうでもいい。いや、正直笑えるくらいなんだけど、の僕にとって、真面目な顔でレースに臨むことのほうが難しかった。

とりあえず温井には僕の微妙な表情は伝わらなかつたらしく、ちよつと得意げに温井は笑った。

「どう？ 結構似合うでしょ？ 女神旅館のデザインって、洪さの中にも粋なお洒落さがあつて、温泉好きの間でも人気なんだって」
白地に紺の文字で女神旅館、と入った浴衣はものすごく普通に見えるんだけど、温井によると帯に入った赤い一本の線だとか、女神をかたどった刺繍なんかがポイントらしい。

「あつ、こんなこと言ってる場合じゃないんだ。レース、始まつちやう！ じゃつ、開けるね！」

声を落として僕に囁きかけると、温井は今までのハイテンションが嘘のように突然座り込んで、きちんとした作法で襖を開けた。

さらり、と揺れるシヨートボブがなぜかいつもよりしとやかに見えたとような ってそんなこと考えてる場合じゃないっての。

「温井様ペア、おいでになりました〜！！」
どんどん、ぱふぱふ。

どこの安物演芸会だ、というような効果音に迎えられ、僕は思わず回れ右、と帰りたくなつた。もちろん温井がそんなことを許すはずもなく、さりげなく腕を引かれながら、僕は大広間の中へと足を踏み入れていく。

旅館の従業員たちが両側に並び、絶え間なく拍手を送る間を歩き、僕らは案内された赤い座布団の上に腰掛けた。

二十人以上は余裕で入れるだろう大広間の右側に作られたスペース。対する左側には黒い座布団が用意されている ということ、あそこが対戦相手の場所ってわけか。

まだ来ていないことに一瞬だけほつとしたのも束の間、襖が開く音がして、またも先ほどの効果音が鳴った。

「女神様ペアのお着きでございます〜！！」

め、女神？ 予想外の名前に驚いて振り向いた僕が目にしたのは、世にも美しい女神 のはずはなく、真っ黒に日焼けした男。

「えっ、め、アレ？」

最小限の単語だけで、僕が聞きたいことは十分温井に伝わったらしい。

拍手の中を堂々と歩いてくる男から視線は外さず、僕の耳元で囁きかけてくる。

「女神守^{メガミモル}　そう、彼こそが温泉レース前回の覇者。この女神旅館の一人息子で大事な跡継ぎ、そして温泉好きの頂点に君臨するカリスマ　温泉王子よ！」

まるでスポーツ漫画の説明役並みに、真剣な顔で僕に言っていた温井。表情からも、これがギャグであるとは思えない。……ギャグであってほしい、なんて思っちゃったりして。

「温泉王子って……」

どこをどう見てもただのサーファーにしか見えないんですけど？

温井の言うところのカリスマ王子は、同じく『女神旅館』と名の入った浴衣（ちゃんと着ているところが笑えるじゃないか）から日焼けした胸板を惜しみなく露出して、色が抜けた肩までの金髪を思いつきりかきあげて僕らをちらりと見る。年は二十代後半くらいだろうか。

僕も百八十はあるんだけど、こいつはもっとデカく見える。ひよろひよろの僕と違って、筋肉ムキムキ。うーん、なんだか妙な敗北感。

「あの外見にだまされちゃだめよ！　彼は若干十二歳で前回の温泉レースに優勝したの。若くても温泉の知識は既にプロよ！」

いやいや、プロって、そんなジャンルあるのかよ。

……って十二歳？　前回のレースは五年前だから、ってことは今、十七歳　！？

見えない。死ぬほど見えない。

僕の驚きどころがずれているとは気づいていないらしい温井は、ごくりと唾を飲み込みながら両手を握り締めた。

「うっ、だめだめ！ 気持ちで負けちゃ。ねっ？ そうだよね、隆史くん？」

「あ、いやあ……うん。そうそう。ガンバレ温井」

棒読みで合わせる僕。でも大丈夫。温井はそんなことに気づく余裕もないらしい。

「そういや、ペアってことは、もう一人女もいるんじゃない……まだ来てないのかな」

一人呟いた僕に、温井はきよとんとした顔で振り向いた。

「何とぼけたこと言ってるの。もう来てるじゃない、あそこに」

指差された先はカリスマサーファー、じゃなかった、温泉王子。

「え、誰もいな……って、あっ、いた！ 小さすぎてわかんない……」
あわてて温井の手でふさがれた言葉は、しっかり相手の耳に届いたらしく、小さな顔がきつとこちらを向いた。

温泉王子の巨体に隠れて見えなかった彼女は、百五十もないだろう小柄な体で、黒髪のツインテール。ぱっと見、小学生かと思ってしまうけれど、その顔はきちんと化粧されていて、よく見るとちゃんとピアスもしている。

「あれ、浴衣着てないじゃん」

僕の二度目の呟きは、どうやらまた禁句だったらしい。

温井があわてて僕の腕を引っ張るも、既に遅かったらしく、ツインテールを揺らしながらこちらへ歩み寄ってきた。

「アナタ、どうやら私のことを知らないようね。言っておくけど、これが私の正装よ？ その名もロリータ三影^{みっかげ}、温泉マニアの間では知らないなんてことは許されなくてよ？」

人差し指を僕に突きつけてから、ロリータ三影とやらは黒いわざわざした衣装を見せ付けるようにひらりと回って見せたのだ。

「え、ええーと……」

口ごもる僕の前に、さつと温井がすっ飛んできた。

「あっ、ごめんなさい！ 彼は温泉界にはまだ入ったばかりで、よく知らないんです！ でも今まだまだ勉強中で……失礼しました、

三影さま」

「おいおい、どんだけ低姿勢なんだ。

ロリータの恐ろしい変人っぷりよりも、彼女にへいこら謝っている温井のほうに心配になってくる。

「ほらっ、隆史くんも謝って！ 知らないかもしれないけど、三影さまは有名な三影温泉の老舗旅館の一人娘で、温泉界の女王、とも呼ばれるくらいの人なんだから！」

声を落として僕に注意する温井。

あっけにとられすぎて言葉が出ない僕と温井の間に、忘れかけていた温泉王子が近寄る。

「まあまあ、いいじゃないですか。新人なんだから知らなくても仕方ないですよ。ああ、君、以降、注意するようにね」

金髪を嫌味なほどにかきあげて、王子が白い歯を見せて笑った。

その笑顔、サーファーというよりもはやホストにしか見えない。僕は曖昧に笑って頷き、温井はそんな王子を嬉しそうに見上げる。「ありがとうございます、王子！ やっぱりカリスマ、お優しいですね！ ネットでの噂通りだわ〜」

「ほわーん、とした温井の目つきは、なんだかうつとりと見惚れているような。」

えっ？ 温井、まさかこんなやつが好みだとか？

「おいおいおい、趣味、悪すぎるんじゃないのか。」

「っていうか、どう考えても異様な空気だ。」

「温泉界って何なんだ。こんな変な奴らばかりが集う場所なのか！？」

狼の群れに迷い込んだ子羊並みにおびえる僕は、あきらかに場違いだ。

本気で逃げようかと襖をちらりと見たその時、ちょうど姿を現したのは女将。

しとやかな和服姿で壇上に上がると、咳払いをして皆を見渡した。何やら談笑していた温井と王子も、まだ両手を腰にあてて鼻息を

荒くしていたロリータ三影もあつという間に静まり、用意された座布団へ腰掛ける。

ああ、これで少しは温泉レースっぽくなってきたかな。

変な安心感と共に座った僕は、にっこりと笑った女将の手に握られた物を見て、また眩暈がしそうになった。

ゴ、ゴング　！？

ここはリングか、格闘場か。

だ、誰かタオルを投げてくれー！！

僕の心の叫びも空しく、女将はゴングを高々と掲げ、満面の笑みで言ったのだ。

「カップルで挑戦、愛の温泉レース！　ただいまより、スタートでございませー！」

カーン！　と打ち鳴らされたゴングの音は、大広間いっぱいに響き渡る。

約一名の青い顔色とは裏腹に、広間を埋め尽くす全員が意気揚々と笑い、拍手をする。

そして、地獄のレースが始まった。

なな、早押し勝負だ、一回戦！

女神山温泉、女神旅館　東京から約五時間の山中にひっそりと佇む老舗旅館。

普段は限られた客だけをひっそりと迎え入れている秘境の温泉宿。近隣の村人たちも寝静まった山中で、唯一明りを灯しているであろう女神旅館の大広間では、温泉の湯気よりも熱い、男と女の戦いが今まさに繰り広げられていた　！

「では第五問、鉄泉の泉質と効能、そして有名な温泉地を述べよ！ピポーン！

おっと今度は温泉王子の黒旗が上がった　！

「はい、女神ペア！」

「湧き出したときは無色透明、空気に触れると褐色になるのが特徴。入浴は月経困難症、筋・関節痛、更年期障害、慢性皮膚病によく、入浴と飲泉で貧血、慢性消化器病、痔によいとされる。強酸性の鉄泉は乾燥肌の人には向かないので注意　鉄泉で有名な温泉地は数多くありますが、最も名だたるものはやはり無馬温泉でしょう。日本最古の温泉と言われ、日本書紀や枕草子に出てくる温泉でもあります。歴史上の人物が数多く訪れていることでも有名ですね」

「さすが温泉王子！　またまた完璧な解答で正解です！！」

ピポピポピポーン！

ぱちぱちぱち。

「では続いて第六問！　放射能泉の泉質と効能、そして有名な温泉地を述べよ！」

ピポーン！

負けずに赤旗、温井の反撃だ　！

「はい、温井ペアどうぞ！」

「はいっ！　えっと、放射能泉はいわゆるラジウム泉で、ラドンを一定量以上含む温泉です。よく放射能は体によくないと心配されが

ちですが、温泉中に含まれる放射能は気体で湧き出した後は空気中に散ってしまうので全く心配はなくて、高血圧、動脈硬化、慢性皮膚病、慢性婦人病によいとされていきます。また、入浴と飲泉で、痛風や慢性消火器病、神経痛、胆石、関節痛にもよいのが有名です！尿酸を尿から出す効果があるので『痛風の湯』とも呼ばれます。あつ、有名な温泉地はロリータ三影さまの三影旅館もある、三影温泉です！」

「おっとー！ これは温井ペア、好プレーだー！ ライバルロリータの温泉地を先に正解！ ロリータさん、悔しそうですねー！」

ピポピポピポーン！

大拍手。

要するに、ただの早押し大会が熱く繰り広げられていた。

温井ペアと言っても、さつきから答えてるのはもちろん温井だけなんだけどね。

一人高みの見物と勝手に決め込んだ僕とは違って、女神ペアは王子だけではなく、きつちりロリータも早押しに参加している。そりゃそうだよな、両方温泉旅館の生まれ育ちなんだから。

ゴシックロリータファッション（温井に聞いたところでは、通称ゴスロリとかいうらしい）に身を包んだロリータ三影と日焼けサーファー温泉王子は、まったくといっていいほど似合いのカップルには見えもしない。

でも温井の言う温泉マニアのカリスマ、という称号は一応間違っていないようだった。

先ほどから例によって温泉の種類別泉質やら効能やら、有名温泉地やら、種々たる問題をきつちりと当てている。温井もすっかり奮闘していて、今のところ勝負は五分五分だ。

まあ、問題が思ったよりも基本的な物なものには拍子抜けしたけれど、まだ一回戦だからかな。

それともこれは早押しの技術勝負だったりして。

何の話だか僕にはさっぱりわからない内容ながら、僕は勝手に分

析していた。

それよりも旅館側がちゃんと早押しボタンやら、押したらチーム別の旗が上がる仕組みやらを用意してあるところに驚いたりしている僕のことなど、きつと誰も見ていないことだろう。

総勢十五名ほどのギャラリー（全て旅館スタッフたち）も手に汗握る攻防に夢中だ。

「ええ〜十問終わったところで、女神ペア六問、温井ペア四問の成績ですね。勝負はほぼ互角！ 両ペア、頑張ってくださいね〜！ 第一回戦も残すところあと半分！ 正解数によって、次なる決戦の舞台が決まりますよ〜！」

司会を務める女将のハイテンションぶりにも大いに驚かされたが、それよりも最後の言葉が気にかかった。

「なあ、温井。正解数によって決戦の舞台が決まるってどういう…」

グラスに用意された水を飲んで休憩をとっている温井に問いかけると、あからさまに眉をしかめ、振り向いた。

「隆史くんってば、また話聞いてない！ さっきルール見ながら説明したのに……」

ふくれながら言いかけた温井だったが、容赦なく次なる問題を読み上げる女将の声で、前を向いてしまった。

どうやらまた聞き流してしまっていたらしい。でもたかだか温泉レースの舞台だ。勝っても負けても大して変わらないだろ。

そんな僕の独断と偏見による予想は、思いつきり外れることとなるのだが、この時の僕にはまだ知る由もないことだった。

「第十八問！ 日本の都道府県で、温泉地が一番多いところといえ

ば、

ピポーン！
またも黒旗、温泉王子だ

！

「北海道！」

ブブー！

意外な音に王子の顔は青ざめた。

「残念ー！ まだ問題は終わってないですね。温泉地が一番多いところといえば北海道、ですが……反対に温泉地が一番少ない都道府県といえは！？」

ピポーン！！

上がった、赤旗 ！！

「はいっ！ 沖縄県！」

ピポピポピポーン！！

大拍手するギャラリーたち。飛び上がって喜ぶ温井。

「大正解 ！！ 温井ペア、これで正解数九問！ ついに女神ペアの九問と並びましたー！！」

「やったやった！ やったね、隆史くん！ 同点だよー！！」

手を取ってぴよんぴよんと飛び跳ねる温井の笑顔に、僕も思わずつられてにへつと笑ってしまう。

なんだ、温泉レース。結構いけるじゃん。

これなら勝利も夢じゃないかもな。

別に勝ち負けなんてどうでもいいつもりでいたけど、ここまで温井が喜ぶなら悪くもないかも、なんて僕が思い始めていたその時。

「ちよつと待ったー！！」

明るいムードの大広間でピポーンとご丁寧に早押しボタンを押したのは、ロリータ三影だった。黒いゴスロリ衣装をわさわさと揺らしながら、僕の前まで歩み寄ってきたロリータは、びしーっとまた人差し指をつきつけて、僕を睨みつけた。

「ちよつとお待ちなさい！ 先ほどから温井ペアは、彼女しか答えていないじゃない！ この、ヒョロヒョロメガネは全くといっていいほど戦力になっていなくてよ！ 彼が本当に温泉好きなのか疑わしいわね。こんなことで正当なレースと云えて？」

身長と反比例した大きな態度でふんぞり返ったロリータの言葉に、温井は動揺した目を僕に向ける。そこを指摘されるとは思っていなかったんだろう。

僕としては、いつか言われるだろうな〜とは思っていたけれど。それにしても、ヒョロヒョロメガネって、変な妖怪みたいなあだ名はやめてくれ。

「ちよつと！ 聞こえてるの？ あなたのことを言ってるのよ？」
「まあまあ、ロリータ。ルールではペアのどちらかが解答を言えばいいということになってるんだから……」

反応のない僕に苛ついたように詰め寄ってくるロリータを、温泉王子が呼び止める。

……つて、ロリータって呼んでるのかよ。

僕の脳内ツッコミはさておき、王子の仲裁に、温井はほっとした顔をしている。

「それはそうだけど　！」
納得の行かない顔で続けようとしたロリータを止めたのは、司会者女将だった。

「女神さんの言う通り、ルールではそうなっておりますが、確かに一度も解答していないとなると、ロリータさんの疑問もわかりませんわね。というわけですので御手洗さん。次の質問、温井ペアの解答者はあなた、ということにさせていただきます」

「えっ!？」

思ってもみない言葉にあせる僕と温井。

ちよつ、ちよつと待ってくれよ。僕は温泉カルト問題なんて　！
あわてる僕と裏腹に、ロリータは嬉々とした顔で頷いている。ついでに「御手洗って名前だったのね。ふっ、お似合いじゃない」とか呟いてるし　コラコラコラ、どどういう意味だ。

「ごめん、隆史くん！ 頑張っつて　！」

小さな声で囁きかけてくる温井に、僕は苦笑い。

ごめんつて、それはこっちの台詞だ。許せ、温井　！

「では第十九問！ 温泉といえば有名な温泉卵、各地で色々な温泉卵が売られており、その種類は――」

そんなの知らないよ　と僕の顔がゆがんだ瞬間、にやり、と勝ち誇った笑みを浮かべた温泉王子が早押しボタンを押した！

「良坂温泉のラジウム玉子、箱目温泉、前生掛温泉の黒たまご、湯原温泉の源泉『荒湯』の温泉卵、雲山温泉の雲山地獄たまご、そして別所温泉の別所地獄めぐりの地獄釜で蒸した、地獄蒸し卵に、海地獄の地獄ゆで卵だ　！！」

これで決まりだ　とでも言わんばかりの勢いで言い切った王子の額からは、爽やかな汗が飛ぶ。ロリータもやった、と両手を振り上げる。そして女将が正解を告げるブザーを押す　かと思いきや、無残にも鈍い音が『ブブー』と響き渡ったのだ。

「残念、不正解　！！」

女将の声に、王子とロリータが「ええっ！？」と叫ぶ。

「これまた先ほどと同じ、問題は続いているんですね〜！　有名な温泉卵の種類は女神さんが仰ったとおりなんです、まだ先があるんです〜！！」

いたずらっぽくウインクまでして見せた女将に、僕と温井は目を合わせる。

いや、そんなキラキラした目で見られても　！

「さて、問題の続きです　以上が、有名な温泉地の温泉卵ですが……家庭で簡単に温泉卵を作る方法は！？」

大きく片手を振り上げて僕のほうを指し示されて、一瞬あつげにとられる。

「はあ！？　そんなのわかるわけ……」

王子が抗議の声を上げる中、僕は思いつきり早押しボタンを押した　！

「はいっ！　御手洗さん正解をどうぞー！！」

「あ、はい。えっと、基本的には二十分から二十五分間、七十から七十五度の湯温を保って卵を茹でれば温泉卵はできますが、沸騰や

温度の降下に気をつけないといけません。それで、簡単に作る方法としてはまず二つ。保温性のある発泡スチロール容器、えっと、カップヌードルの容器なんかが最適なんですが、そこに卵を入れて、卵が隠れるまで熱湯を注ぎます。ふたをして三十分から四十分程度放置しておくだけで出来上がり、というわけです。またもう一つの作り方としては、ペーパードリップ式のコーヒーマーカーを使うやり方です。サーバーに生卵をいれ、フィルターペーパーとコーヒード豆はもちろんセットせず、普通にドリップを行うだけ、という方法で、どちらもとっても簡単です。あつ、ただ、どちらの場合も冷蔵庫から出したばかりの冷えた卵を使うとひびが入るので、常温に戻した卵を使うことだけが注意点かな」

ピポピポピポーン！！

「大正解　！！　すばらしい！　御手洗さん、完璧な解答で十九問目、正解ですー！！」

女将が大げさなまでに拍手をして、それにつられたようにギャラリィが、そして温井までもが手が痛くなりそうなほど拍手をしてくれた。

……　ってというか……　こんなんでいいのか？

心の中で一人呟きながらも、温井の満面の笑顔に僕は応えるように頭を掻いた。温井は僕の肩を叩きながら小声で興奮冷めやらぬように囁く。

「すっごい！　すごいじゃない、隆史くん！　日頃の料理知識と、くだらないウンチクが役立ったね！」

くだらないは余計なんだけど。

叩かれすぎてふらつきながらも、僕は笑った。

「あは、あはは。まあ、それほどでもないけどさ」

とりあえず、よかつたー！

内心ものすごく胸をなでおろしている僕を、王子とロリータが悔しそうな目で見る。

「ちよっと！　そんな問題ってある！？　温泉とどう関係があるの

よ!?」

「ごもつともです、な叫びをまさに小さなライオンのような勢いで発したロリータを止めたのは、ゴングをもった女将だった。カンカンカン、と小さくゴングを叩きながら、割って入る。」

「はいはいはい。そこ、お静かに！ 温泉卵と温泉は切っても切り離せないもの。真の温泉愛好家ならば、家庭でも温泉卵を作りたい、と思っただけですよー！ はい、最終問題に入りまーす!!!」

その口調やら、発言にツツコミどころはたくさんあったが、まあここは救われたとして触れないでおこう。

「ふっ、まあいいさ！ 次の最終問題は必ずとる！ 温泉王子の名にかけてもね！」

浴衣の裾を翻しながら、ニヤリと白い歯を光らせる王子。

っていうか、早く済ませて帰りたくなってきた。

「次の問題は温井さんにもまた解答権が戻りますよ。というわけで読み上げます！ 最終問題！」

「ごくり、と皆が喉を鳴らす。ギャラリーが固唾をのんで見守る。

女将がゴングを打ち鳴らす！

「では第二十問！ 俗に『脳卒中の湯』と呼ばれている温泉の旧泉質名と新泉質名、および有名な温泉地を答えよ。！」

って急に難しすぎだろー!!!

僕の心の声はやはり間違いでなかったらしく、温井は早押しボタンを押そうとした手を一瞬躊躇させ、頭の中で考えているようだった。

ピポーン!!!

颯爽と黒旗を上げたのは、ロリータだった。!!!

「脳卒中の湯とは、旧泉質名で正苦味泉、そして新泉質名ではマグネシウム 硫酸温泉のこと！ 陽イオンの主成分がマグネシウムイオンという、日本でも数少ない名湯よー!!! 有名温泉地は、北海道、登同温泉と岐阜県の濁川温泉!!!」

ピポピポピポーン!!!

「大正解　！！　さすがロリータ三影！　カリスマ温泉ブロガーの名を欲しいままにしているだけありますね！！」

女将の賞賛にロリータはこれ以上ないほど胸をのけぞらせ、「おーっほっほっほ」と高笑いまでしている。

カ、カリスマ温泉ブロガーでゴシツクロリータで……って覚えられんわ！！

「とうわけで、二十問まで戦って、両者十問ずつ正解という互角の勝負！　これでは決着がつきませんので、ここは」

スペシャル問題でも提出されるのかと息を呑んだ僕たちに、女将は鮮やかな赤い唇をにんまりとゆるませて、大きくゴングを鳴らした。

「じゃんけん勝負です！！」

なんじゃそりゃー！！

思いつきりずっこけそうになった僕は、当然抗議の声が上がるだろうと温井や王子たちを見やる。ところが両者共に何の疑問もないような顔をして、腕まくりまでしている始末。

「ちよっ、ちよっちよっ！　じゃんけんって……」

今での戦いは何だったんだ。そんなんでいいのか、温泉レース。

ずれたメガネを直して、思わずふらつきながら近寄ろうとしたが、既に止める間もなくじゃんけん勝負は始まっていた。

「あーいこでしょー！　じゃんけんっ」

ポーンツと出された手は、チヨキとパー。

「勝者、女神ペアー！！」

女将の言葉でひしっと抱きあう王子とロリータ。

「やった、やったわねー王子！」

「君のおかげさ、ロリータ！！」

温井ペア、敗れたり。

ってコラコラコラ　！！

はち、ゴールを目指せ、二回戦！

草木も眠る丑三つ時　じゃなかった、きっと都会ではまだまだ活動時間であるはずの午後九時半。僕らは真つ暗な山中に放り出されていた。

「温井……これは一体全体どういうことなんだ？」

ようやく問いかけた僕に、温井がしょんぼりと俯く。

「ごめんね、隆史くん……私がじゃんけんで負けさえしなければ

」

「いやいや、そういう問題じゃなくてさ。なんで温泉レースなのに、僕らこんなトコに突っ立ってんのってこと」

そう、僕らは第一回戦に惜しくも敗れた後、浴衣のまま女神旅館裏の森に立たされている。しかもご丁寧には赤提灯までぶら下げて。

「いくら負けたからって、なんであつちは引き続き旅館の中でクイズで、なんで僕らは外に追い出されるわけ？」

変な羽虫がうようよ寄ってくるのを振り払いながら、僕は温井をじとつと振り返る。

「だからそれは、敗者に決められたルールで、問題に答えながら進み、女神神社から女神洞窟、そして温井滝までを制限時間の一時間内にぐるっつと一回りしてくるっていうコースで

」

「って、こんな暗闇でどうやって進むんだよ？　大体問題がどこにあるかもわかんないんだぞ？」

「大丈夫、大丈夫！　正解すれば次の道順が書いた地図がもらえるようになってるんだって！」

温井は不必要なほど明るい声でそう言うと、ガッツポーズまでしてみせる。

「さっ、さっきは負けちゃったから挽回するぞー！　ほらほら時間

なくなっちゃう！ 最初の問題はここだって！」

まだまだ文句の言い足りない僕を置いて、温井はさっさと赤提灯で照らしながら少し先にあつた大木の幹に駆け寄った。

まったく 仕方ないなあ、もう。

ため息を大きく吐き出して後を追うと、温井は既に幹に縛り付けられていた赤い問題用紙を開いていた。

「第二回戦は選択問題だって。えっと、なにに？ 正解だと思うほうへ進め あっ、写真だ。この写真は、ある有名温泉地のものです。ヒント、中国地方にあるダムの前に広がる混浴の露天風呂、砂湯で有名な温泉地で、美作三湯の一つ…… A、原湯温泉 B、津奥温泉、C、郷湯温泉…… 正解を選べ、って簡単じゃない！ 答えはAの原湯温泉だよ！」

「えーっと、ってことはこの紙の中からAの用紙を選ぶってことか……」
温井の示すAの用紙を中から選ぶと、開いてみる。

すると中には略図があり、次の問題が置かれた場所が示されていた。

「見せて見せて！ えっと、次の問題はもう少し進んだ先のお地蔵さんのところだって。行こっ」

はしゃいだ様子の温井に腕を引っ張られ、僕はよろめきながらついていく。

問題の地蔵はすぐに見つかり、温井は嬉々として次の問題を読んでいる。

と、その時フクロウらしき鳥の聲がして、バサバサという羽音に僕は辺りを見回した。

こんな暗闇で地蔵だの、赤提灯だの、しかも神社やら洞窟だなんて、これって完璧に胆だめしコースもいとこじゃないか。

実を言うと、僕はあんまりこういう雰囲気が好きじゃなくて……

「あ、あのさあ、温井。これって正解を選んでなかった場合」

考えたくない可能性ではあるけれど、僕は口にせずにはいられなかった。

こんな夜の山中を間違ったルートでぐるぐる回り続けて帰れなくなる、なーんてことは……。

「えっ、何？ ごめん、隆史くん。今、集中したいから話しかけなideくれる？ えっと答えはBだから、次は坂道を登った先の鳥居だつて。あつ、ほらほらちゃんんと女神神社に近づいてるっ。行こ行こ！」

対する温井は全くもって気にする様子もなく、さっさと僕を引っ張っていく。

そっか、鳥居だつて言うならもうすぐなんだろう。ここは温井を信じて、付いていくしかないんだしな。心配しすぎだったかな。

なんだか背中にいやーな鳥肌がたつてる気がしなくもないんだけど、しばらく坂道を登ってから見えてきた赤い鳥居に、僕はほっと息を吐いていた。

「あつ、鳥居だー！ よかった、ほら。問題があるよ！」

温井が安心したように坂道を駆け上がった。言うとおりそこには古びた赤い鳥居があつて、おそらく地元の間人すらごくたまーにしか足を踏み入れてなさそうな、雑草が伸びた石段が見えた。ひっそりと置かれた石に刻まれた『女神神社』の文字を横目で確かめながら、僕は温井を追いかけた。

鳥居にくくりつけられていた問題用紙を開いて、またも簡単に答えを導き出した温井に、なんとか僕も落ち着いてくる。

やっぱり温井は本物の温泉マニアだよな。自信持って正解してるし、ルートもあつてるみたいだ。

十段もなさそうな石段を見上げた先には、こじんまりとした神社がぼんやりと浮かび上がって見えている。

「次は賽銭箱のところだつて。ついでにお参りしてこーよ！」

温井も勝算を得たのだろう、明るい声で僕を呼ぶ。さっきよりは

空も晴れて、月明かりがあるから思ったよりも夜道が苦痛じゃなかった。石段を赤提灯で照らしながら進んでいると、なんだか肝だめしというよりも祭りのような気分になってくる。

そういえば、中学の頃は温井にひっぱられて、夏祭りなんか一緒にに行かされたもんだ。お祭りごとが好きで温井は、夏になると花火やら盆踊りやらをはしごして、そのたびに僕を呼んだ。面倒くさかったりもしたけど、出店で金魚をとったり、わた飴を食べたりするのも実はちよつと楽しかった。一度学校のやつらに会って、からかわれてからは二人で行かなくなった。温井にとっては例の体調を気にせず気軽に遊べる相手だっただけなんだろうし、僕だって特別意識してたつもりはなかったけど、やっぱり変な噂をたてられるのが嫌だったから。

そういえばあれから、温井は誰とも祭りに行かなかったのかな。

「ほら、隆史くんもお参りしなよ。この際だから、お願いごともしたら？ 私はねー、温泉レースの勝利を願つといたよ！」

五円玉を放り込んで、隣で手を合わせていた温井に言われ、僕は我に帰る。

願いごとって人に言っちゃいけないんだろ、とかそんな言葉が出てきそうになるけれど、温井の純粋な笑顔に釘をさす気にもなれずに、僕はとりあえず小銭入れから十円玉を取り出した。

「願いごとって言ってもなあ……特に思いつかないんだけど」

「寂しいこと言うなあ〜色々あるでしょ？ あつ、そうそう、料理人になりたい、とかさ！」

温井に肩を叩かれて、僕は思わず目を見開いてしまう。

「そんな昔の言葉、まだ覚えてたのか？ そんなこと言ってたの、中学の頃だけなんだけど……」

「やだなあ、覚えてるに決まってるじゃない！ 私が温泉好きだからー、将来温泉旅館の女将になってさ、隆史くんは料理が好きだから、旅館の料理人になったらちよつどいいねって話したじゃない！」

それに隆史くん、料理得意だし、いつも料理の本とか見て研究してるんだから、忘れるわけないよ」

「そ、そんなの、お前が勝手に言っただけだろ？」

思わず鮮やかに蘇ってきた昔の温井の笑顔にドキッとして、目をそらしてしまった僕に、温井はふふつと笑った。

「照れちゃってー！ 隆史くん、照れたら私のこと『温井』じゃなくって『お前』って呼ぶもんね」

「なっ、違うよ。バカなこと言っただけで、さっさと次の問題の場所探せよ」

やたらに細かい温井の指摘に、ガラにもなく顔が熱くなる。

照れてなんかないって。急に昔のことなんか思い出しちゃって、ちよつと動揺したただけだ。

ずっと忘れたつもりでいたはずの昔の夢を、温井がちゃんと覚えてたから？

現実的に難しいとか、あれこれ考えて無難に経済学部になんて入ったくせに、本当は捨てきれずにいた夢。でも、最近じゃ、本当は自分がどうなりたいのかわからなくなったりしてた。

けれどいつも笑顔で僕の作った料理を『美味しい』と言ってくれる温井。

そんな時だけは自信が持てた。って、何を考えてんだ、僕は。

落ち着け、とずれたメガネを直して横を見ると、温井はもう真剣な顔で賽銭箱の下に置いてあった問題用紙とにらめっこしていた。

なんだよ、あいかわらず切り替え早いんだから、まったく。

人を動揺させといて、あっさり次行くなっただけ。

っておいおい、何を望んでんだ、僕は。

一人あわあわしている僕はさておき、温井はまたまた嬉しそうに問題用紙を閉じて言った。

「次は神社の裏にある石段の先のご神木だっ！ そこからすぐに女神洞窟の入り口があるんだってさ」

「そつか。え、でもさ、もしかしてこの夜に洞窟の中まで入れってんじゃないよな？」

「当たり前じゃない！ 洞窟の入り口にきつと問題用紙が入ってるんだよ。こんな真つ暗な中、洞窟なんか入れるわけないでしょ」

「そりゃそうか。んで温井滝ってのはそつから近いの？」

「ああ、えつとね、洞窟から歩いて十分くらいだつてパンフレットには書いてあつたよ。それとね、その滝、温井ヌクイじゃなくつて、オンジヨウダキつて読むんだつて」

「えつ、そうなの？ てつきり温井ヌクイの名字と同じだと思つて、なんか関係でもあるのかつて聞こうと思つてたところだよ」

「でしょ？ 私も気になつて来る前にママに聞いたんだけど、ただの偶然みたい」

温井は驚き顔の僕に得意げな笑みを見せ、人差し指を立てながら続ける。

「それでこつちの話は女将さんに聞いたんだけどね、この女神山は名前の通り、女神が宿るつて信じられててね、その女神つていうのが、温井神オンジヨウノカミつていう名前で、この女神神社の氏神ともされてるんだつて。女神山を作つて、女神温泉を湧き出させたつて言われてて、古くは何でも傷が治る万能の湯、なんて呼ばれたくらいに村人たちは女神温泉に感謝して、大事に大事に守つてきたらしいよ！ ねつ？ すごいでしょ？ へへつ、いつもウンチク聞かされてるお返し！」

さすがに温泉関連だとすぐにきつちり暗記するらしい。温井はいかにも嬉しそつに舌を出した。まあ、山の神つてのは古来から女神だつて信じられてるのは知つてたから、そのへんは不思議じゃなかつただけだよ。ちよつとお株をとられたような、複雑な気分では曖昧に笑い返した。

「それでね、まだあるんだけど、温井神が好んで休む場所がその温井滝つてところだつて思われてるらしいよ。順調に回れば、一時間もかからないかもね！ さつ、ご神木へレッツゴー！」

赤提灯を振り上げて、次を目指す温井に付いていきながら、僕は女神社社の拝殿を見ていた。

雑草が生えた境内に同じく、ところどころの木材がはがれ、お世辞にも大事にされているようには思えなかった。まあ、あくまでも温井の話は昔の信仰だっただけか。

その万能の湯とやらの女神温泉で秘境の宿を建て、村は恩恵を預かっているんだろうし、名ばかりの女神より、今は実際の温泉が大事なことなんだろうな。

なんてシビアなことを考えているうちに裏の石段をおり、たどり着いた先には注連縄が巻かれたご神木がひっそりと立っていた。大人が何人も手を回すほどの太さがある幹を想像したりしていたけれど、ここもやっぱりさびれた神社ともども、申し訳程度に太い、普通の杉の木だった。

「これって本当にご神木なのか……？」

僕の訝しげな表情は温井の耳には届かなかったようで、温井はやる気満々に注連縄につるされた次の問題用紙を取り、読んでいる。

どうにも納得がいかないような　普通、ご神木ってその神社で一番高い立派な木にされるはずで、しかも境内の中にあるはずじゃないのか？　うーん、一応この鬱蒼と手入れなんかされてないような森を鎮守の森として、その中でご神木を守っていると考えるべきなのか。

「隆史くん、隆史くんったら！」

「あつ、え、何？」

すっかりご神木を見上げながら考えにふけっていた僕を、温井は何度も呼んでいたらしい。

唇をとがらせて、赤提灯で森の中を照らす。

「もうーだから問題が解けたから、次の道がわかったって言うてるじゃない！　あのね、次はね　きゃっ」

急に頭上の木に飛んできたフクロウらしき鳥の羽音に驚いた温井

が、僕にしがみつく。それと同時に足元の木の根にすべった温井の体を支えようとして、僕は急いで腕を伸ばす。

それも間に合わず、僕は派手に二人ともすっころんでしまった。

「あ、いたたた……ご、ごめん、隆史くん」

「いや、温井こそ、大丈夫」

目を開いたらいきなり見えた温井のドアップに僕は思わず言葉を止める。

いつの間にか下になった僕の上に温井が倒れていて、超至近距離に温井の顔があったのだ。

「う　ごっ、ごめん！」

あわてて離れ、起き上がると、温井も飛び起きた。

「うっ、うっん！　こちらこそ」

はだけた浴衣の裾をそそくさと直し、草なんかをはらっている温井の横顔も、心なしに赤く見えた。

っていつか、さっき胸の上を感じたむにゅっとしたやわらかいものは。。

わーっ！　か、考えるな！　そっ、想像するな！

否応なく目で追ってしまふ温井の浴衣姿が、いきなり今までと違って見えてくる。

なんだ僕、どうしちゃったんだ。

ばくばくと騒ぎ出す心臓をなんとか落ち着かせながら、僕は頭にわいてきたやばいイメージを必死で消していた。

そんな僕の内心など露知らないのであるう温井は、ショートボブをかきあげながら、僕を見上げてくる。

「次はすぐその道路まで出て、右へまっすぐ歩いた先の橋だってそこを超えればきつと洞窟だよ。あともう少し、頑張ろうね！」

月明かりに白く照らされた温井の頬は少し上気していて、なんだかいつもより艶めいて見えたりなんか　ってコラコラ！　どうしちゃまったんだー御手洗隆史！

「よーし！　頑張るぞー！！」

自分でもよくわからない胸の収縮に気づかれないように、僕はやたらと大きな声で賛成した。

「どっ、どうしちゃったの？ 隆史くんってば」

笑いながら隣を歩く温井。その頭は僕の頭一つ分より下にある。昔はこんなに身長差もなかったのに、いつの間にか追い越していやでも自分より小さな温井が女の子なんだなと感じずにはいられなくて。

いつも見てきた普通の笑顔がなんか違って見える。

「っておいおい、本当にどうしたんだ、僕は。」

僕が僕の心臓と格闘している間に、いつの間にか歩みは進み、橋の上の問題を解き、温井が示す細い道をくだり、僕らは洞窟の前まで来ていた。

「女神洞窟、ばっちりだね！」

提灯の明かりで看板に書かれた文字を照らした温井が笑う。

その笑顔にまた変な気持ちにならない間にと、僕は率先して洞窟へと歩き出した。

「問題はどこだ、問題は？」

さつさと解いて、滝も回って帰ってしまおう。早くレースを終わらして、こんな秘境の宿からも抜け出して、とにかく普通の日常に戻りたかった。変なプレッシャーからも逃げ出して、いつも通りの日常へ。そうさ、五年目の『腐れ縁』も解消して。

「……え？ 解消？」

そうか、このレースが終わったら、温井との『腐れ縁』も終わるんだ。

もうこんな面倒なことに付き合う必要もない。起こしに来られたり、迷惑な用事を頼まれることもない。こんな風に一緒に歩いたりすることも。

「ないんだ……」

なんか急に胸の真ん中がきゅーっと痛くなったような。

「ない……そう、ないのよ！」

「そんな何度も言われなくてもわかってるよ！　ってえ、何が？」

「だから問題がないの！　なんでないの？　さっきの紙にはちゃんと洞窟の前の木に縛り付けてあるって……」

あわてた様子で木の幹のところを探し回っている温井のそばに近寄り、僕はしゃがみこんだ。

「あのさ、この切れた紐みたいなやつ……もしかしてこれで縛ってあったんじゃないのか？　切れてるみたいだけど、まさか動物とかが噛んで持って行っちゃったとか？」

白いビニール紐の切れ端を持ち上げて、僕が言った途端、温井の顔色が変わる。

「えーっ！？　そんなの、せつかく順調に進んできたのに、どうしたらいいのー！？　問題がなかったら答えようがないじゃない！　しかも次のルートがわからなかったら、帰れないよ。どっ、どうしよー隆史くん！」

今までの余裕が嘘のようにあわてふためきだした温井は、見事に涙目になっている。

「おいおい、落ち着けよ。今通ってきた道なら覚えてるから、引き返せばちゃんと帰れるよ」

「だめだよ、引き返したら意味ないじゃない！　ちゃんと問題に答えて正解しなきゃ。総正解数で最終的な勝ち負けが決まるんだよ？　ここでギブアップしたら負けちゃう！」

今にも泣きそうな温井が詰め寄ってきて、僕はつつと後ずさる。
いや、だからそんな近づくなつて。

「わ、わかったよ。じゃあもうちょっと探してみよう。でもどうしても見つからなかったら、あきらめて戻るんだぞ？　じゃなきゃあ携帯は圏外だし、この暗い山中じゃ、本気で遭難する危険性だつてないわけじゃないんだからな！」

そこだけは念を押して言い切ると、温井は素直に頷いた。

すっかりウルウルした瞳で見上げているもんだから、なんだか落

ち着かない。

まったく　なんでこんなレースにここまで……。

そう頭ではぼやきながらも、僕は洞窟の入り口付近をうろつくと歩き回る。

温井も同じように探している。その懸命な後ろ姿を見ると、なかなかあきらめるとも言えなくて、僕らは延々と十五分は問題用紙を探し続けていた。

とにかくこれが終われば、こいつとの『腐れ縁』も解消して、自由なキャンパスライフが戻ってくるんだ。そしたら一人で楽しく　楽しく？

僕は楽しく何をするんだ？　大学で勉強？　家でゲーム？　男友達と遊んだり？

ってそれは今でもやってるし　いやいやそうじゃなくて、休日に呼び出されて長い買い物に付き合ったりだとか、勝手に見たいと大騒ぎされて映画を見に行ったりだとか、そういう面倒なことをやらずにすむってことで……そうだよ、これからは僕も他の可愛い女の子とそういうことをすればいいんだよ！

……他の女の子と？　うーん。なんだかピンと来ないな。

いやいやいや！

そんなこと考えてるから女の子と縁がないんだ。ここはそういう不精なところをパーツと変えて、楽しまなきゃ。

そうだよ、温井だって僕じゃなく、他に好きな男とでも行けばいいじゃないか。

そこまで考えたところで、温井が僕を呼んだ。

「隆史くん！　隆史くん！　見てみて！　あつたよーっ！！」

温井が嬉しげに叫んだのは、なんと洞窟の中。入ってすぐのところで問題用紙らしきものを振りながら、僕に笑いかけている。

「おっ、おい！　そんなところに入っちゃ……」

すべるんだから、危ないだろう、とまさに言おうとしたその瞬間。温井の体が見事にゆらめき、転んだ。そしてそれだけではとどま

らず 少し下りになっている洞窟の中へ転がり、姿を消したのである。

「ぬっ、温井 ！！！」

僕の叫びは、大きく暗い穴を開けた洞窟の中へと吸い込まれていた。

きゆう、一人で挑戦！ 温泉レース。

「ぬっ、温井 っ！！」

あわてて駆け寄って赤提灯で照らすと、少し下りになった洞窟の中で、温井は倒れていた。

それ以上坂になっていなかったことにほっとして、中へ入り、そつと温井のそばにしゃがむ。

「大丈夫か？ しっかりしろよ！」

肩をゆすつても、温井はどうやら頭を打って気絶してしまつたらしく、返事もせず、目も開けなかった。

「おいおい……マジかよ。これじゃあ本気でレースなんて言ってる場合じゃ……」

かついで旅館へ戻らないと、と温井の体に手をかけると、腕がだらりと落ちて、放り出された赤提灯とは裏腹に、右手にしっかりと握られたままだった問題用紙が見えた。

意識がなくてもこんなに握り締めているなんて どれだけ必死なんだよ……温井の奴。

ため息を吐き出して、温井の手から問題用紙を抜き取る。

倒れた温井と、問題用紙を見比べる。

いやいや、どう考えても早くこいつを旅館へ連れて行って医者に見せるほうが先だろう。

そう理性は訴えるのに、さっき見つけたと嬉しそうに笑つた温井の顔が頭にちらつく。

どこにも外傷はないし、寝息もしっかりしている。きっと軽い脳震盪でも起こしたただけだろうとは思っけど って何を考えてんだ、僕は。

一人で続行なんて、絶対無理だ。何よりこれ以上やってる場合じゃ……。

真つ暗な洞窟で、提灯の明かりに浮かび上がる温井の寝顔。そし

て必死で探し当てた問題用紙。そのどちらもが僕に無言で訴えているような気がする。

「……レースを続けるって？ 馬鹿言うなよ、温井」

一人で呟いても、答えは帰ってこない。

けれど今までの必死な温井からすれば、おそらく無意識下でもそう思っているに違いなかった。

「見るだけ、見るだけだからな」

誰に言い訳しているのかもわからないまま呟いて、僕はそっと問題用紙を開いた。

そこに書かれた問題は。

「女神山温泉の秘湯、女神の湯の泉質と効能は次のうちどれか？」

そういえば、まだ僕は温泉にも入っていないし、肝心のこの温泉についてなんかまったく気にしてなかった。それに第一、僕は温泉自体興味がないんだから知るはずもない。

「A、二酸化炭素温泉 高血圧、動脈硬化、運動麻痺、筋・関節痛、打撲、切り傷、冷え症、更年期障害、不妊症によく、入浴と飲泉では慢性消化器病、慢性便秘にいい。B、塩化物泉 筋・関節痛、打撲、捻挫、冷え症、慢性婦人病、月経障害、不妊症、病後回復にいい。入浴と飲泉で貧血、慢性消化器病、慢性便秘にいい。C、単純温泉 病後回復期の静養、手術後の療養、骨折・外傷後の療養にいい。飲泉は軽い胃腸炎によく、また、尿量は増す。って何だよこれーわかるわけないだろ、そんなの！」

ああ、せめてパンフレットをもっとよく見とくんだった。こんな温井やあの温泉王子たちだったら、軽く正解してるはずで僕は自分の無力を呪った。

いや、ちよつと待てよ……？

さつき温井がこの女神温泉は古くは何でも傷が治る万能の湯だって信じられてたって言ってたよな 万能の湯、万能の湯……どこかで聞いたことがあるような。

ちよつと待て、脳内の雑学回路を総動員するんだー！！

えつと、傷が治る、って言ってたっけ　　そうだ！　　そういえば昔『歴史雑学これだけ知ってればあなたも歴史王！』で読んだぞ。

確か、武田信玄は温泉好きで有名で、戦いで傷ついた将兵を温泉で治療させたりしたんだっけ。それで『信玄の隠し湯』なんてものがあちこちにあるとかって　　。あ、そういえば……信玄といえればじいちゃんが昔言ってたぞ。

じいちゃんの生まれ育った山梨にも『信玄の隠し湯』って呼ばれる温泉があるって　　！

そこまで思いついて、僕は頭をガシガシ掻いた。

「くそー、泉質なんて覚えてないぞ。じいちゃん、何て言ってたっけー？　肝心なところが抜けてるじゃないか」

なんとか解けそうだって言うのに　　気を失った温井をチラリと見て、僕は唇を噛んだ。

ここまで思い出したんだ。意地でも問題解いて、この際ゴールまでたどり着いてやろうじゃないか！　温井が泣くのは見たくない。なんでかなんてわからないけど、温井を笑顔にさせてやれるなら、くだらないレースでも何でもチャレンジしてやろうとまで思えてきたのだ。

「待てよ、もう一度問題をよく見てみる　　Aも効能はたくさん書いてあるし、Bだってそうだ。万能の湯っていうにはどちらも……あ、でも待てよ。AやBなら、不妊症にも効くって書いてあるし、これなら昔から『子宝の湯』とか言われそうだよな。温井はそんなこと言ってたぞ。ってことはCか？　療養にいいって書いてあるし……でもCはなんだか他の二つより効能が少ないし、それに単純温泉って名前からして秘湯には似合わないような……くそー、どれだかわかんないよ」

じいちゃん、頼む。なんか思い出させてくれー！！

これならもう少し真面目にじいちゃんの銭湯でも通つとけばよかった。

あれ、待てよ？

単純温泉って名前がどうちゃらってそういえば聞いたような気がする。

あれは　　そうだ！　富士の湯の常連おばちゃんたちが昔話してたぞ！

日本で一番多い温泉の泉質は単純温泉だって。

名前の印象はよくないけど、実はいろんな病気に効くお湯だって言ってたよな　　。

よしっ、もうここは単純温泉にかけるしかない！

急いで問題用紙の中のこの紙をひきちぎるように開く。

するとそこには次の問題設置場所であるオンジョウタキ温井滝への略図が示されていた。

ここから歩いて十分だって温井は言ってたよな。おっしや、急ぐぞー！

そこで初めて圏外表示の出た携帯電話を取り出して時間を見た僕は、思わず叫ぶ。

「うわっ、もう十時十分じゃないか！　タイムリミットまであと二十分しかないよ！　これじゃあ滝まで行っても戻ってる時間が、それに温井をかついでちゃあスピードはもっと遅くなるわけで、もう制限時間内へのゴールは不可能に近い。」

だめだ。もう無理じゃないか。

急激に風船がしぼむように萎えていく心。もしかして僕も頑張ればやれるかもしれないだなんて、一体なんでそんなこと思ったんだろう。

もともとわかるわけがないのに。ガラにもなく燃えちゃったりして、僕らしくもない。

「ごめん、温井……」

ため息と共にもらした僕の呟きに、温井は反応を示すことはなく、

僕は肩を落としながら、温井をかつぐべく、そばに寄った。

そしてその時ふと下を見て、僕は瞳を見開いた。

「これ 水？」

今まで薄暗くて気づかなかったけれど、足元には自然にできたような溝があつて、そこにチヨロチヨロと水が流れていた。よく見ると洞窟の岩肌から少しずつ流れてきている水が、下にたまって流れを作っているようだった。

もしかして、という予感めいた思いに、僕は立ち上がり、岩壁を触りながら、ゆっくりと洞窟の中へと進んでいく。入り口から見ると、洞窟は闇も濃くて、深いものだと思つていた。

けれど僕の期待に応えるように、洞窟の反対側から、次第にかすかな光が差し込んできているのがわかる。

よく洞窟の裏には滝があつたり する、なんて都合のいいことはないよな。

まさかな、と自分で自分を抑えながらも、段々と増えていく足元の水の流れや、光が差す出口のほうからどことなく水音のようなものが聞こえてくるような気がして 僕は走った！

走って、走って、案の定滑って転んだ その先には出口があつて、僕は自分の目を疑った。

「 やった、やったぞ、温井 ! 滝だ、滝があつたぞー!!」
そう、まさに洞窟を出たすぐそばには、白く、細長い滝が静かに流れ落ちていたのだ。

そしてそのそばには、確かに木でできた『温井滝』の看板。

「おっしゃあー!! してやったりだ! ざまみろ、温泉レース!
!」

もうこの時には異常なハイテンションで、僕は一人叫んでいた。まさか十分かかると思つた滝が、こんなにすぐ近くにあつたとは。問題用紙も近道は教えてくれなかったってわけだ。

眼鏡の中の僕の瞳は、きつとキラーンと得意げに光っていたことだろつ。

僕はその小さな看板にくくりつけてあった最後の問題用紙を目ざとく発見し、掴み取った。

「よし、ここまで来たら意地でもあと一問正解してやる！」
いつもの僕なら信じられないくらいに気合に押されるがまさに、僕は問題を食い入るように見つめた。

「なになに、最終問題　この地域に伝わる伝説では、この女神山はその名の通り、女神が統べるとされており、その名は温井神オンジヨウノガミとい

います。よしっ！　これならさつき温井に聞いたぞ」
ラッキーだと勝算を踏んだ僕は、次に見つけた文章に、思わず言葉を止めた。

「……温井神は、その昔女神山温泉を湧き出させ、人々に多くの恩恵をもたらしましたが　その温泉にやってきた人間の男に恋をして、叶わぬ恋に身をやつし、男の恋人である女への嫉妬で怒り狂い、それから温泉に入った女たちに呪いをかけるようになりました……。もちろん現代では迷信であるとはわかってはいますが、実際に明治にいたるまでこの女神山温泉は女人禁制とされていたのでした。さて、言い伝えでは、女たちにはどんな呪いがかけられたのでしょうか。A、子供が生めなくなる。B、醜い顔に変わってしまう。C、化け物にされてしまう　？」

ふうん、女神山温泉にこんな逸話があったのか。さすがにここまでは温井も知らなかったみたいだな。まあ昔話とかにはよくあるような内容だけだよ。

やっぱり最終問題。マニアックな伝説がもと、と来たもんだ。こんな完全に当てずっぽうしかないじゃないか　。
ふう、と深く息を吐き出して、眉を寄せた僕は、ふと洞窟の中に置いてきた温井を思い出していた。

今ここに温泉がわいてたりしたら、またパワーアップしてくれるのになあ　。

……っつて、アレ？

温泉に入ったら呪われ、何かの変化が現れるって　なんか温泉の異常体質と似てるよな。

知力も体力も異常なほどにパワーアップする、なんて人間が昔もいたとしたら、それって化け物みたいなものだよな　って、まさか……。

見上げた先に流れ落ちる静かな温泉滝。女神が好んで休むとされた清らかな流れ　その清浄な滝が、急に呪われた恐ろしいものすら見えてくる。

「ま、まさかな」

はは、と一人乾いた笑いをもらしている　場合じゃなかった！ 携帯を見ると既に十時二十分。もう完全にタイムオーバーだ。

くそーっ、ごめん、温泉！　頑張ったんだけど、もうこれ以上は無理だ。

せめて問題だけは最後まで解いてから帰るからな　。

「おしっ！　答えはこーっ！！」

ほぼやけくそ状態で開いたこの用紙　そこに書いてあったのは、オメデトウの文字と、旅館までの略図　って、え……？

「えーっ!？」

叫んでしまうのも無理はない。いや、おそらく、この状況では誰でもきつとそう叫ぶだろう。

だって思いつきり書いてあったのだ。

旅館はすぐそこです、ってさ　。

ガツクリ、と崩れ落ちる僕。落ちる赤提灯。そして夜風にバサバサと揺れる周囲の木々。

その葉たちの間に、僕は見たのだ。あの、鮮やかなオレンジ電飾の看板を。

しかもよくよく見ると、ちょうど看板の下に立っている人物がいる。

「そ、掃除のおばあちゃん……?」

やっぱり、確かにさっき部屋の前で会った掃除のおばあちゃんだ。

相変わらず手ぬぐいほつかむりと、眼鏡にマスク。腰の曲がった姿で僕を見つけて、おいでおいでをするように手招きしている。

そうだった、今は気落ちしている場合じゃない。

とりあえず温井を旅館に連れて帰らなければ。

頑張りすぎたせいでもう体はふらふらだったけど、気力と根性で僕は温井をおぶって、旅館まで歩いた。

玄関までたどり着いた時にはもうおばあちゃんはいなかったけれど、代わりにとすべきか、女将と仲居さんたちが総出で迎えてくれた。

祝、ゴールインの垂れ幕付きで。

いやいや、オレンジ看板とゴールインって、やっぱりなんか違うだろー！

僕の心の叫びは、夜空と湯けむりに吸い込まれていくのだった。

じゅう、露天で混浴、最終決戦！

ほっこり。

まさにそんな言葉が似合う温泉旅館の一室で、温泉まんじゅうを片手にお茶を飲むひと時。

「はあ〜っ、やっぱり温泉といえば温泉まんじゅうだよねっ」

うんうん、確かに……この香ばしい皮とこし餡の風味がなんとも上品。

「ってそんなこと言ってる場合じゃないっ！！」

ダーン、と突然テーブルを叩いた僕に、温井は目を剥いて喉をつまらせそうになっていた。

「げほっ、えほっ　びっくりしたあ。急に大声出すんだもん。それに私、なんか変なこと言った？」

あ、そうだった。また脳内の独り言と現実を混同してしまった。って、落ち着いてる場合じゃなく。

「いや、そういうわけじゃないけど、だってさ……やっぱりどう考えてもおかしいって。結局旅館の裏から出発して、付近をぐるぐる回って帰ってきただけってことだろ？　何の意味があつて外に行つたわけ？　あの王子だか何だかペアと一緒に旅館の中でクイズやつとけばいいじゃんか」

先ほどからどうしても納得の行かない疑問をもう一度温井にぶつける。(どうしてもあの垂れ幕と女将たちの笑顔の中じゃあぶつける気になれなかったのだ)

温井はまたか、という顔で、温泉まんじゅうの残りを飲み込んでから、またお茶を注いでいる。

「だからあ、それはさつきも言つたじゃない。私だつて知らなかつたけど、やっぱり夜の山中を本気で遭難しそうな危険なコースなんて行かせるわけにはいかなくて旅館側の配慮だよ、きつと。まあ、洞窟の中を通る近道に気づくとは思わなかつたつて、女将さんたち

も驚いてたけど。あれには私もびっくりだったよ。目覚めてみたらなんと隆史くんが二問も解いてくれて、ちゃんとゴールしてたんだもん。それに、またおぶってもらっちゃったね。私、すっごく感動しちゃった。ありがとうね、隆史くん！」

目覚めてから三十分　もう何度目かわからないほどの感謝の言葉と笑顔。

ま、まあ、そりゃあ確かに悪くはないもんだけどさ。

「あ、いや、だからさ……それはいいんだけど、結局外でやる意味が」

「そりゃあやつぱりカップルで挑戦するレースだけに、お互い協力するってことじゃない？ とにかくいいじゃない、二回戦はなんといつても全問正解で、大奮闘したんだからさ！」

なんととってもこれが温井のご機嫌な理由だろう。

一応女将によると、不正解の解答を選んでいた場合、回り道だったり、わかりにくいルートを進むはめになっていたらしい。その点で僕らは最短のルート（途中、まぐれによる更に最短な近道）をたどってきたので、それも含め、かなりの高ポイントを叩き出したってことにはなってるらしいけど。

「ただ、いくら考えてもこの温泉レースはどこがおかしいような気がするの僕だけか？」

温井の言う温泉好きの最高峰であるはずのレースにしては、問題もそこまで難しくはないし、何より二組だけで競われて、ギャラリ―は旅館関係者だけ。それに特に先ほどの二回戦なんて、女神ペアがどんなレースをやったのかすらこちらには知らされてないし、これじゃあいくらでも捏造だってできるんじゃないのか……なんてこと、こんなに喜んでる温井には言えっこない、よなあ。

軽く一息ついて、とりあえず目の前の温泉まんじゅうを頬張るところにする。

ししおどしの音にも迎えられ、再びこの部屋で落ち着いてみると、なんだか真面目に考えることすらバカらしくなってきた。

まあいいや、温泉レースが何であれ、もう次の最終決戦を残すばかり。

あと少し温井に付き合っただけでやれば、このくだらない週末も終わるのだ。

……終わる。そう、温井との『腐れ縁』も終わるんだっけ。なんでだろう、なんか変な気分だ。

心の中がスカスカするような、何かどっかに忘れものでもしてきたような、心もとない感じ。

「なんか 寂しいよね」

「えっ!？」

急にぽつんと呟いた温井の言葉に、僕は必要以上にドキッとしてしまった。

寂しい……？ まさか、これって寂しいって気持ちなのか？ ずっと面倒だと思ってきたはずなのに。早く解放されたいと願ってきたはずなのに。いや、そんなはずは。

も、もしかして温井も僕との『腐れ縁』が終わるのが寂しいなんてこと。。

「レース、もう次で終わっちゃうんだなあ、と思っただらさ。急に寂しくなっちゃった」

あはは、と笑われて、僕は思いっきり拍子抜けした。

なんだ、そっちかよ。って、僕、何を期待してたんだ？

「温井様、もうお時間ですので、露天風呂のほうへお越しく下さいませ」

襖の向こうから仲居さんの声がして、僕は二重に慌てた。

「あっ、はい！ 今、行きます。さっ、隆史くん、行こっ！ もう決勝戦始まるよ？」

浴衣の裾をおさえながら立ち上がった温井に、僕は思わず口ごもる。

「えっ、いやでも、行っって、露天風呂に？ っっていうか一緒に!？」

ずり落ちそうになるメガネを押し戻しながら訊ねたら、温井は一瞬ポカンとしてから、可笑しそうに僕の肩を叩いた。

「やだあ、もしかして裸で入ると思ったの？ 女将さんが水着用意してくれてるって言ってたじゃない。まーた、話聞いてないんだから。ふふ、隆史くんのスケベー！」

イヤン、とふざけて胸をおさえるふりをする温井に、僕は慌てて目をそらした。

「ばっ、何言ってるんだよ。ちょっと驚いたただけだろ？ バカなこと言っていないで、さっさと行くぞ！」

ショートボブを揺らしながら、「はあい」と笑い混じりに答える温井。

その浴衣の後ろ姿にさっきの話を重ねて、また騒ぎ出す心臓を抑えて、僕は急いだ。

ドッ、ドキドキなんてしてないからな。断じて、絶対、百パーセント 僕は冷静だ！

勢いあまってつんのめった僕に、温井は声を立てて笑った。

女神温泉、女神の湯 大露天風呂、と達筆で書かれた木の看板を見上げて、僕は旅館側が用意してくれた、これまた『女神旅館』の文字入りの白いトランクス型水着を履いていた。

ちょうど股の部分に赤いラインと女神の顔らしきものがデザインされているところがどうにも落ち着かないけれど、まあなんでもいや、と開き直って更衣室の鏡を覗く。

ああ、それにしてもこの情けないスタイル、なんとかならないもんかな。

普段あまり気にしてないとはいえ、どうしても水着になるとヒョロヒョロした自分の裸が嫌になる。どう見ても海やプールが似合わない痩せこけた体。でもよく誤解されるけど、本当は別に運動音痴

とかじゃないんだよな。ただ、筋肉つけても表に表れないってだけで、って空しい言い訳、一人でしてたって仕方がないか。誰も見てやしないのに、って見てるし！

「これはこれは、結構よくお似合いですよ、御手洗さん」

絶対に十七歳とは思えないテノールの声で、そう背後から話しかけられて、僕はため息を吐き出す。そうだった。またこいつと対戦するんだった。

「それはどうも……そちらこそ、よく似合って、ますよね」

引きつりそうになりながらなんとか笑って言ってやると、温泉王子は見事な逆三角形ボディを黒光りさせながら、白い歯を見せる。どうでもいいけど、なんでこいつはビキニ型なんだ？

パチン、とゴムを鳴らしてピチピチの水着を確かめる王子から、僕はひそかに目をそらした。

「有難うございます。よく言われるんですよ、肉体美もすばらしいって」

はっはっは。

笑いあう僕ら。

そのテンションの違いからも逃れるべく、露天風呂へと続くガラス戸へさっさと向かおうとする僕を、王子が追いかけてくる。

「聞きましたよ、二回戦、全問正解だったそうじゃないですか。

まあ僕らもなんですけどね、今回の対戦はまれに見る均衡戦になりそうだなって期待してるんですよ」

「は、はあ。それはどうも」

なんだこいつ、結構いい奴なのかも。

「なんととっても手ごたえのない勝負ほど面白くないものはないですからね〜！ ギリギリまで食らいついてくる敵を打ちのめすほどの快感は他にないですよ」

前言撤回。やっぱり外見と同じく僕とは気が合いそうにもない性格らしい。

適当な返事をして、会話を終わらせようとする僕のことには気づ

いていないようで、王子は肩までの金髪を嫌味な仕草でかきあげて笑った。

「それにしても……温井、泉さんだったっけ。温泉には詳しいし、よく見ると結構可愛いですよね」

「え……？」

聞き流そうとしてから、なんとなく聞き流せない単語が出てきて、僕は振り向いた。

「僕、ああいうひたむきな女性に弱いんですよ。自分の好きなことに一生懸命って姿にそえられるっていうか。なんだか御手洗さんがうらやましくなっちゃうなあ」

あからさまに不快な表情が顔に出てしまったらしく、王子はあわてて手を振る。

「いやだな、冗談ですよ。素敵な彼女ですねって言いたかっただけで」

なんだ、こいつ。笑ってはいるけど、なんか目が挑戦的なよ
うな。

変な寒気が背中に走るのを打ち消そうと、僕はわざと笑ってやった。

「それはどうも。あなたの彼女のロリータさんも、温泉については詳しくるほど詳しいようで　理想的な彼女なんじゃないですか？」

僕はご遠慮したいけど。

内心そう付け加えながらも言っただけの僕に、王子は頭をかいて微笑む。

「うーん、それはそうなんですけどね。僕、新しいもの好きなもんで」

……はあ！？

今度こそ聞き捨てならない言い方に立ち止まった僕を追い抜いて、王子は爽やかに言い放ったのだ。

「さっ、最終決戦に向かうとしましょうか！　フェアプレーでお互

「頑張りましょう！」

メガネの奥から睨みつけたことを、奴はわかっていたのかどうなのか。

鼻息だけでこらえた僕は、奴に続こうとしてふと更衣室を掃除しているおばあちゃんに気づいた。またまた全身防備ならぬ、顔面防備なおばあちゃんは表情はわからなかったけれど、確かに優しい声で僕に言ったのだ。

「周りの声は気にしないで、あなたの愛と、夢のために頑張んなさい」と。

あ、愛と夢……？

きつとおばあちゃんは僕を温泉好きだと信じて疑ってなくて、レスに臨む緊張を和らげてくれようと言ってくれたのだろう。

けれど、僕はその言葉になぜか気持ちが静まっていくのを感じていた。

僕の愛と夢　それがなんだか、今の僕にはわからない。

夢、だなんて、あの時温井が言ってたみたいに『料理人』を本気で目指していたのは中学の頃のこと。今は料理が好きだとはいつても、その道を目指したいのかどうかも正直わからない。かといって別の夢すら思い浮かばない。

愛、といっても同じだ。僕は、愛とか恋とかそんなもの、今まで意識したことはなかった。

だけど、この気持ちだけは確かなものだ。

温井を、笑顔にしてやりたい　その想いなら、誰にも負けない。それでいいんだ。

僕はおばあちゃんに笑顔を返し、湯気の立ち上る露天風呂へと足を踏み入れたのだった。

「お集まりの皆さま　さて、今宵行われてまいりました温泉レ-

スも、この戦いで最後となりました！ 一回戦は同点の末、公正なるじゃんけん勝負で女神ペアの勝利。そして次なる二回戦は旅館の中と外に分かれてのカップルレース、なんと二組とも全問正解という快拳を成し遂げるといふ歴代の温泉レースにもないほどの素晴らしい戦いとなっておりませう。いよいよ、勝負はこの露天風呂にて、決戦となるわけでございます。――！！」

どこから現れたのか、立派なスポットライトに照らされた女将が興奮もあらわに叫ぶ。その手にはしっかりとマイクが握られている。ギャラリーたち しつこく言うが、旅館のスタッフたちだ も拍手と声援を送っている。

そして向かい合った僕らと女神ペアは、勝負への熱い思いを胸に毅然と地面を踏みしめるのかと思いきや、大露天風呂に浸かっているのだった。

うーん、ちよつと冷える夜風にちよつどいい湯加減 ってどうも調子狂うなあ。

「いよいよ最終決戦、頑張ろうね！ 隆史くん！」
両手をぎゅつと握り締めて温井が僕を見る。

どうでもいいけど、なんでビキニなんだ。

しつかりとこちらにも女神旅館の文字が記され、赤いラインがちよつど 両胸を横断するように走っている。い、いかんいかん。

どうした隆史。落ち着け隆史。

予想外に発育していたらしい温井の胸元を至近距離で見せられて、心の臓がまたしても落ち着かない。そんなこととは露知らない温井は、返事のない僕にますます近づいて、見上げてくる。

「どうしたの？ 疲れちゃった？ ごめんね、あともうちよつとだから――」

わかったわかった。だからピンク色の頬とか、潤んだ瞳とか、滑らかな白い肌とかを近づけるなつての。

「ああ、うん。大丈夫だよ、大丈夫。頑張ろうな」

なんとか普段通りのトーンで返せた言葉に、よつやく温井も笑う。

その笑顔を見て和みかけた僕は、向かい側から王子の目線を感じて表情を引き締めた。

くそ、なんだよあいつ。変な目で見るなよな。

にやけた目線が温井のビキニに行ってるようにしか見えなくて、僕はさりげなくずっと温井の前に体を出した。

「さあつ、頑張りましょう王子！ 勝利は渡さなくってよー！」

温泉の中で更にパワーアップしたらしいハイテンションで、ロリィタは高笑いする。

ついでに言うと、水着もやっぱり黒でワンピース。フリルのついたスカート水着は、やはりゴスロリ風らしい。そこまで徹底しているとなんだか何も言えなくなるな。

……ん？

温泉でパワーアップ、といえば……：そっいえば温井！

あわてて振り返った先で、温井は意味深に笑ってピースサインを送ってくる。

そうだった。温泉に浸かっている間は知力、体力共に温井に敵はない。

この勝負、いただきじゃないか！

既に夜も十一時半。一体こんなところで何をやってんだろう、ってなツッコミはさておき、僕と温井の最後の戦いが始まるうとしていた！

じゅういち、最後は愛か、温泉か!?

さあ、何でも来い　!

僕と温井が目を合わせて頷きあい、きつと女将を見据えると同時に、勝負はゴングの音(まだ持ってたのか)で始まった。

どんなカルト問題でも、今の温井ならば迎え撃てるはず!

行け行け、温井! 温の花を咲かせるんだー!!

「さあ、最終決戦となればどんな難問が待ち受けているのかと両ペア、どきどきされていることでしょう　今年は更にリニューアル! 二人の力をあわせないと解けない難問でございます!!!」

女将の説明に僕らはごくりと喉を鳴らす。王子とロリータも真剣に次の言葉を待つ。

「さて、その難問とは何なのか　ファイナルラウンドは、愛の二人羽織勝負です!!!」

はあ!?

あっけにとられたのは僕だけではないらしく、温井も大口を開けてかたまり、王子とロリータも二人顔を見合わせている。

「なっ、何なのよ、それは!　前回は温泉に浸かって早押し勝負だったじゃない!」

湯の中で憤慨したように立ったロリータが女将に向かって叫ぶ。
ゴスロリ水着では、あまり迫力もあったもんじゃないが。

「えっ、前回って　ロリータも前回のレースに参加したんだ」
今更ながらの僕の疑問に、温井が真顔で頷く。

「うん、そうだよ。ちなみに、温泉で熱燗を飲んで、早く飲み干したほうがボタンを押して解答権を得られるっていう勝負だったってネットには書いてあったけど……」

温井の戸惑いぎみな答えに、僕はへえ、と頷きかけて、思わず顔を上げた。

「ん?　熱燗って　あの王子とかいう奴、その時十二歳だったん

「だろ？」

「あ、うん。だから、飲むのはその時の彼女が担当したらしいよ。ちなみに二十歳だったとか」

「えっ、その時の彼女って　ロリータじゃないの？」

十二と二十歳って　立派な犯罪じゃ……とおそろおそろツツコミたくもなっただけど、それより気になるのは王子とロリータの関係だ。

「ああ、そうなの。今はそうんだけど　実は二人とも当時は別々の相手と付き合っていて、レースに出てね。レースでの対戦がきっかけで付き合うようになったとか　ネットでは結構噂だったみたい」

そんなことよりも最終勝負、といわんばかりの温井の真剣な瞳に僕はそれ以上言葉をかけることはできなかった。

でっ、でも、それってものすごくおかしくないか？

愛の温泉レースだか何だかうたっておいて、対戦相手の恋人と付き合うだなんて　。

一人納得の行かない僕にかまうこともなく、女将の説明は続いていた。

「いつも同じ内容では面白くございませんでしょう？　今回の二人羽織は、読んで字のごとく、男性が肩にはおった羽織の中に女性がもぐりこみ、両手を袖に通して手探りで男性に料理を食べさせてもらいます。温泉旅館フルコース計十品を一回ずつ、食べ終わったペアから解答権が得られ、問題に答えていただくという勝負ですよ。解答は男女どちらの方にしていたいただいても結構です。では、始めます！」

まだ文句の言い足りないようなロリータも容赦なく抑えた女将のゴング。

配られた女神旅館の赤い羽織を肩に羽織る王子。その意味ありげな目に僕は受けてたつように自分も羽織を着た。

要するに　あいつは対戦相手の恋人を獲ったってことだ。例え

ロリータが望んでそうなったにしろ、あいつは事実自分の恋人を捨て、新しい女を選んだ。

それでさっきの挑発めいた言葉が納得行くつてもんだ。

温井のことも獲ってやるっていうのかよ。ふざけんな、サーファ―王子。

お前にだけは温井は渡さないからな！

僕の羽織の中に、温井がもぐりこんでくる。

なんでだろう、なんかムカついて仕方ない。温井が他の男と付き合つとか、ましてやあんな王子に獲られるとか、そんなことを想像するだけで腹が立つ。

もういいや、今は深く考えないで、目の前の相手を打ちのめすのみ！

温井と僕の『腐れ縁』パワーを見せてやる　！

「では最後の超カルト問題、スタートです！！ 第一問、兵庫県は無馬温泉、和歌山県の黒浜温泉、愛媛県の道前温泉は日本三古湯と言われ、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』などに登場します。それらには、古代の天皇や皇族が入浴したと記されていますが、『日本書紀』巻第二十六にも牟婁山の湯（黒浜温泉）に、ある皇子が行かれたと記されています。その後、クーデターを企てたとされ、殺されましたが、これは何という皇子でしょうか？ 料理はまずは食前酒となっています！ あっ、ご安心ください。今回は両者未成年ですので、ノンアルコールにしてあります。飲み干された方から正解をどうぞ！！」

女将が言い終わる前から温井の手は世にも恐ろしいほどのスピードでさつと動き、僕の口元に正確にグラスをつけた。僕もまさに生きるか死ぬかの決死の覚悟で飲み干す。そして一秒の狂いもなく、温井の手のひらがパーン、とボタンを押した。

ここまでおよそ三秒、という早業に女将も驚きを隠せないように一瞬口ごもるも、すぐに気を取り直したようにマイクを持った。

「はい、温井ペア！ 正解をどうぞ！」

「有馬王子！」

羽織の中からくぐもった温井の声が叫ぶ。すぐさま女将が大拍手を返した。

「素晴らしい！ なんと人間業とは思えないほどのスピード解答！

しかも大正解ですーすー！ あまりの早業に、女神ペア、言葉も出ない様子ですねー」

「なっ、何よ、何なの！ こっちも負けてられなくってよ、王子！ 同じくくぐもった声でロリータがあせりを表す。王子もあっけにとられていた顔を真顔に戻し、頷いた。僕も何を飲んだのかもわからないくらいだったけれど、気圧されているばあいじゃない。温井のスピードにちゃんと付いていかなければ。

それにしても問題いきなり難しすぎるような気がするんだけど。

やっぱり最終決戦ってことか。でもパワーアップした温井ならやれる。

僕さえ頑張れば、きっと勝利はもう目の前だ！

気合を入れなおそうとメガネを直しかけた僕の指は、スカッと何の手ごたえもなく滑る。

ああ、そうか。湯気でくもるから、コンタクトに変えたんだ。一応使い捨て用持ってきてよかった。変なところで安心する僕とは裏腹に、緊張感あふれる女将の声が上がる。

「では続いて第二問 元禄二年、俳聖松尾芭蕉は門人曾良を伴って、奥の細道の旅に出ました。その中で、東北・北陸地方の温泉地にも何力所か立ち寄っています。それでは、以下の紀行文『奥の細道』の一説の中で、吟じられている俳句『や、菊は手折らぬ湯の匂』の部分が指し示している温泉地はどこですか？ 続いで二品目はもずくと胡瓜の酢の物で」

す、と女将が言い終わる前に、温井の手は動き、僕はもずくと胡瓜を一気飲みしていた。

咳き込む僕の背後で、温井が解答権を得た途端、勢いよく叫んだ。

「石川県の中山温泉！！ 『中山や、菊は手折らぬ湯の匂』と残しています！」

喉をそのまま通っていったもずくと胡瓜のなんともいえない感覚に僕が耐えている間にも、温井は既に正解していた。

「す、素晴らしいー！！ 温井ペア、まさに神が降臨したかのとき、早業解答ー！！」

大興奮した女将を、王子が面白くなさそうに見上げる。

それもそうだ、まだ答えるどころか、料理に手をつけることもできずにいるのだ。

戦いにならないってのはこのことかな、温泉王子さん。

ひそかに心の中で僕は笑う。しかし、この格好暑いな。もともと風呂なんて『カラスの行水』な僕にとつて、こんなに長く浸かっていることなどないものだから、慣れないお湯の熱さにも頭がぼーっとしてくる。それに背中に温井がくっついてるから、って、そ、そういうえばこのムニユツとした、身に覚えのある感触は……。

わーっ！ バカ隆史！ か、考えるな！！ 今は考えちゃだめだ！
ともすれば背中に集中しそうになる感覚を追い払いながら、僕は次の問題に備える。

なんとかその試みは成功し、食べることに食すること。とにかくひたすら口に入れられた物をすごい勢いで飲み込んで、僕は温井の奮闘をサポートした。

それにしてもすごいな、温井。

パワーアップするってのがここまですごいもんだとは、考えてもみなかった。

そういえば、一体いつからこんな体質になったんだろう。
なんでこんなパワーが出るんだろう。

あんまり続けたら負担にはならないんだろうか。

訊ねたいことは色々あつたけれど、今はそれどころじゃない。

温井はとりあえず平気そうに戦っているし、もう残りあと二問だ。王子は完全に出遅れて、温井の一人勝ち。これで、あいつの夢で

ある温泉レース勝利も目前。

よかつたな、温井　笑顔が花開く様子を想像して、僕も思わず笑いそうになった、その時だった。背中の温井が一瞬ふらついて、僕にもたれてきたのだ。

「おっ、おい、温井？　大丈夫か？」

慌てて小声で訊ねると、少し遅れて温井が体を起こした。

「……大丈夫。ごめんごめん、ちよつと足が滑っちゃって」

笑ってごまかす温井に、一抹の不安がよぎるが、女将の声が次の問題を読み上げていく。

「では次で第九問！　最終問題まであと一問となりました！　ラスト二問は、プラス十点となっていますので、まだまだ勝負はわかりませんよ！　女神ペアも頑張ってくださいね！」

またまたなんじゃそりゃ、なご都合主義ルールを持ち出してくる女将にも、僕はもう動揺もしなかった。この勢いじゃあ、もう確実だろう。あとは自分の胃袋と湯あたりに気をつけるだけだ。

「第九問読み上げます！　ドキュメンタリー映画の舞台にもなった、千二百年の歴史を持つ東北の湯治場、人口四百人程度の小さな温泉地の名称を述べよ！」

もう既にわかるはずのない超カルト問題にも温井は屈さない。またまたすさまじい勢いでメインの焼き魚を僕が食べ終えた途端、温井がボタンを目にも止まらないスピードで押した！

「はいっ！　答えは、山形県大蔵村膝折温泉っ！！」

背中から力強い声上がり、文句ない正解を女将が告げる。そしていよいよ完全なる勝利まであと一問、というところで、「ちよつと待ったあゝっ！！」というロリータの悲痛なる叫びが響き渡った。

もそもそつと王子の羽織から出てきた小さなゴスロリ女王は、汗だくでへなつと下がっているツインテールを振り乱して、女将を見上げた。

「こつ、こんな一方的な勝負ってないわ！　おかしいわよ、こんな

スピード、とてもじゃないけど人間業とは思えない！ きつと何かズルしているんだわ！ そうじゃなきゃ、この私が手も足も出ないなんて、そんなこと　！」

ふるふると震えながら抗議するロリータ。よっぽど悔しいのだから、メイクが落ちてきた童顔を気にすることもなく、僕らを睨みつけてくる。

「ズルなんてしてるわけないだろ。変なこと言わないでくれよ」

そうだ、僕らは真正銘、頑張って戦いに挑んでいるだけだ。温井の力は　ズルなんかじゃない。

既に僕も限界に近いくらいのぼせちゃって、ロリータの怒りなど怖くもなともなかった。どうせ温井の力なんてわかりっこない。もう次で決まりだ　そんな余裕が僕の背中を押していたんだ。「まあまあ、ロリータ。ズルだなんて、どうやってやるって言っただい。まさか僕の母がこの温井ペアに正解の情報を前もって流しているとしても　？」

そうだ、そんな馬鹿なことはあるわけない。だって、女将は王子の母親なんだから　ってそういえばそうだった！

ものすごく結びつかない二人を眺めながら、僕が妙な笑いをこらえている間にも、王子とロリータの言い争いはエスカレートしていった。

「だって、どう考えたって早すぎるわ！　しかもこんな難問を次々と正解していくなんて　」

まだ文句を言っているロリータに、王子はあきれたように肩をすくめて見せ、僕をチラリと見やった。

「気にしないでやってくれ。ただロリータは自分より有能な女性に嫉妬しているだけなんだよ」

温井に向けたのである言葉に、僕は眉を寄せる。でも温井は僕の羽織から出てこようとはせず、じっとして　って、あれ、温井？　なんか動かないような　。

慌てて体勢を変えて羽織の中を覗くと、温井がぐったりとこちら

に倒れこんでくるではないか！

「温井！ おい、大丈夫か？」

「そうだ、やっぱりいきなり無理すぎたんだ！」

「いくら温泉でパワーアップするとはいっても、こいつだって人間なんだから、限界があるに違いない。頭を打って気絶した二回戦とは訳が違う。白すぎる顔色に僕は一気に不安になって、温井を支えた。」

「すつ、すみません！ 温井の様子が とても勝負を続けられる状態じゃ……」

「言いかけた僕の手を、温井の手が掴む。どうやらまだ意識はあるらしい。」

「た、隆史くん、大丈夫。大丈夫だから！」

「必死でそう言う温井の目。だけでももう今にも倒れそうにしか見えない。」

「お願い、あともう少しだから続け……」

「なおも言いつのる温井の頬を、僕は思わず平手で叩いていた。」

「何言つてんだよ、馬鹿！ レースなんてまた今度挑戦すればいいだろ？ 自分の体とレースと、どっちが大事なんだよ！」

「隆史く」

「驚いた顔の温井の肩を掴む。」

「こんな冷たい体で、これ以上レースなんて続けさせられるかよ！ お前にとつては大事なレースでも、僕にとつちゃ温井のほうがもっと大事なんだからな！」

「今までにない勢いで、僕は叫びきった。」

「目の前で温井が瞳を見開き、涙がまるくあふれるのがゆっくりと、スローモーションのように見えた。」

「そして僕の間は、そこで止まった。」

「いや、体も、周囲の空気も、まるで鼓動までも止まったかのような錯覚を覚える。静まり返った露天風呂で、温かいお湯の中で、僕

はその奇跡みたいな感触を受け止めていた　温井の、やわらかく
て優しい、唇の感触を。

体全体に感じる温井の温もり。そう、確かに、不思議なことに
触れ合ったその瞬間に、あれほど冷たかった温井の体が温かさを
取り戻していくのがわかった。

なぜ、なんて考える暇もなく　僕は初めての感覚とあふれてく
る感情にただ飲み込まれ、キス、していたんだ。

温井の唇と体が離れていつてはじめて、僕は正気に戻った。

ここが露天風呂で、皆が見てて、僕と温井は、たったいま公衆の
前でキス　しちゃったんだよーっ!?

「ぬっ、ぬっ、ぬっ……!?!」

呼びなれた名前すら出てこない。どわっと汗がふきだして、風呂
でのぼせたのか、キスでのぼせたのか、頭がくらくらして、目がチ
カチカして、とにかく　パニック状態になっている僕を見上げて、
温井は急に我に帰ったように真っ赤になった。それでも意を決した
ように笑顔を浮かべ、僕をまっすぐに見つめたのだ。

「ありがとう、隆史くん　!」

温井が潤んだ瞳で僕を見る。なぜかその姿がさつきより元気にな
っていることに僕は驚きながらも、安心していた。

このままレースを棄権しても、もうこれで悔いはないや。温井の
こんな笑顔が見られたんだから。

そう胸の中で思った　その瞬間、女将が笑顔で手を叩き始めた
のだ。

拍手、拍手、拍手。女将に続いて、ギャラリーも、そしてなんと
温泉王子も、はたまたロリータまでもが手を叩いている。どの顔も
皆、一様に満面の笑顔で。

「えっ、なっ、何　?」

さすがに戸惑いながら温井が呟き、僕も瞳を合わせた　その途
端、どこから登場したのか大きなくす玉がパァーンと弾け、ひらひ

らと色とりどりの紙切れが落ちてくる。

そして一番デカイ紙切れが僕らの頭上に舞い落ちて、そこには。

「カップルで挑戦、愛の温泉レース、勝利おめでとう……？」

紙切れかと思っただものは、手ぬぐいで、女神旅館の文字が刻まれたそのど真ん中に、達筆でそう記されていたのだった。

読み上げ、信じられないような顔をする温井と僕に、女将が微笑みかける。

「温泉レース、最終問題はこれで終了です。真の温泉好きとは、心の底から温泉を愛せるもの。そしてそのためには人を愛せる人でなければならぬ。レースより何よりも、お互いを想いあえる者でなければ真の勝利者にはなりえないのです。ねえ、沙耶子さん？」

にっこりと振り返って問いかけた女将の声に頷いて、歩み寄ってくる人物。その見慣れた姿に、僕は思わず声を上げる。

「そ、掃除のおばあちゃん？」

僕の言葉に、顔をあげ、にんまり笑ったのはあの掃除のおばあちゃんだった。

「って、アレ？ 笑ってる？」

いつものマスクがない。その口元は意外なほどに綺麗に口紅で彩られている。

それに、肌がなんか いや、どう見てもおばあちゃんの肌じゃないような……。

訝しげに見守る僕と温井の前で、あの底すら見えないような分厚い眼鏡を取り去って、曲がった腰までしゃきつと伸ばして見せたのは、なんと！

「マツ、ママ!？」

温井の叫びにいたずらっぽく笑って、白髪まじりのおさげ髪の形のカツラすら取り払ったのは、確かに温井のおばさんだったのだ。

じゆうに、レースの真相、温井の真実。

「ご丁寧に掃除婦ファッションをびらりーんっと効果音まで付いてきそうな勢いで脱ぎ去った温井ママは、その下にきちんとしたピンク色のスーツを着ていた。

何度か温井に用事を頼まれて家へ行った時、見たことのあるスタイルだ。

「ママ、今日は確かパパと九州旅行だったんじゃない　なんでここにいるの!？」

温井も全く知らなかったことのように、目をぱちくりさせながら聞いている。娘のその姿になんとも嬉しそうな笑みを浮かべた温井ママは、後ろに立っていた女将を見やる。

女将はしつかと頷いて、マイクを取り出し、口を開いた。

「その答えは私からご説明申し上げますわ、泉お嬢様」

お、お嬢様　!？」

その呼び方にも、女将のレース中のハイテンション司会者ぶりは打って変わった落ち着きぶりに、僕は驚く。しかし温井はそれ自体には動じていないように、答えを待っていた。

「まずは心からのお詫びを　温泉レースとは、そもそも真っ赤な嘘だったのですぞいませす」

「まっ、真っ赤な嘘　!？」

僕と温井の声が重なる。そ、そんなまさか。だったら今までのレースは、カルト問題は、そもそもこの秘境の宿へのご招待は。

「一体、どういう……どういうことなんですか!」

シヨックを隠しきれない温井の青ざめた顔色に、まあまあ、というように出てきたのは温泉王子。並びにロリータ三影。忘れかけていたゴスロリ水着をひらひらさせながらニッコリと微笑む。

「温井のおばさまからお願ひされました。対戦者のふりをして、レースに参加してくれとね。まあ、もともと温泉が好きなのは嘘

ではないから、簡単なことだったけれど」

そのキャラも嘘ではないらしい。ツインテールを振りながら笑う。
「そうそう。僕も母に頼まれてね　早押しボタンやらスポットライトやら、あれこれ小道具を用意するのも大変だったよ」

「っておいおい、お前が用意したのかよ　！？」

あともう少しで口から出てきそうになったツッコミを、僕はなんとか胸の中だけにとどめる。

とりあえず問題はそこじゃないってことは冷静に判断できたんだけど。

「いやあ、でもクイズは母も含め、三影旅館の女将　すなわちロリータのお母さんや、その他の精鋭を集めて作成したものだから、僕も純粹に楽しませてもらったけれどね。ただ、勝利者が君たちになることはわかっていたから　そこにいる温井泉さんの特殊能力で」

キラーンと白い歯を光らせた王子の発言に、温井も僕も言葉をなくす。

けれど旅館関係者も王子もロリータも、ちなみに女将も、誰一人驚いた顔すらしていなかった。

「温井泉　温泉に浸かっている間は、知能、体力などの身体能力が、爆発的に上昇する。その効果は、温泉の効能や湯加減などが良いほど、それに比例して増大するという特殊な能力を持った女性。しかし一見素晴らしく思えるその能力も、定期的　なんと一日ごとに湯に浸からないと、本来の体調を維持できなくなるという不便さを伴う」

王子の得意げな説明に、温井は表情を強張らせている。

その場の凍りついたような空気をものともせず、あとを受けたのはロリータだった。

「湯は、風呂でも代替可能。ただし、温泉の元を入れると効果が上がる。一番良いのは、どこかの温泉に入りに行くこと　まあ、あなたの趣味が『温泉めぐり』だってことは、全て必然に裏づけされ

ているってわけよね。ただ、本当に温泉が好きだっただけは、十分見せてもらったわ」

僕すらもはつきり知りもしなかった温井の体質をすらすらと話す二人に、温井は驚きと戸惑いを隠せない表情のまま、その目線をたった一人全てを知り得る人物に向けた。

「ママ 話したの？ どうして……私にはあれほど誰にも言うなっかって言っただのに！ どうして話しちゃうのよ！ それに、レースと私の体質とどう関係が……！」

もはや堪えられなかつたらしく、湯船を出て石の床に立つ母親のもとへ駆け寄った温井を、温井ママは静かに微笑んだまま受け止める。

「泉……ごめんね。本当はあなたにも言っただけなのに」
「え？」

怪訝そうに見つめる温井の髪を愛しそうに撫でて、温井ママは笑う。その笑顔は、どこか寂しげで どこか満足げなものでもあった。

「あなたの体質は、代々母方の血から受け継がれたもの つまり、私も、私の母親 そう、あなたのおばあちゃんも、そのまたおばあちゃんも、皆この能力を持っていた……」

持っていた、って……過去形？

僕と同じことに気づいたらしい温井の瞳に、温井ママはしっかりと頷いてみせる。

「中にはその能力を楽しんだ人もいたけれど、本当はとても不便なもの。普通の女の子ならどれほどよかつたかと、どれだけ嘆いたことか……泉、あなたも願っているようにね。だけどママもおばあちゃんも……皆、ある日を境に、この能力から解放されたのよ」

そんな そんなに嫌がっていたなんて、僕は全く知らなかった。だって温井はいつも笑って、大したことではないように話していたから。

「解放つて、どうやって　！？」

まさに待ち望んでいた言葉であったかのように、つめよつた温井を見て、更に僕は確信していた。本当はずっとずっと、温井はこの体質を嫌がっていたんだと。普通の女の子になりたいと願っていたんだと。それも知らずに僕は、その能力のせいで『腐れ縁』が始まったとぼやいて……。

ズキンと痛んだ胸を押さえて、母親の言葉を待つ温井の後ろ姿を、僕も見つめる。

そして温井ママは答えを話す　のかと思いきや、その優しげな瞳は温井ではなく、僕を捉えながら笑つたのだ。

「泉、温泉に入つて、御手洗くんを投げ飛ばしてごらんさい」

なっ、なんで僕　しかも投げ飛ばすって！

あせる僕と温井ママを訝しげに見比べながら、温井は言われたとおり僕に僕の体にかける。

その手は簡単に僕を持ち上げ　られなかった。

「えっ、なんで！？　どういうこと！？」

目を大きく見開いて、何度も試してみようとする温井だったけれど、僕の体を投げ飛ばすどころか、うんうん唸つて力を入れても、僕の体を持ち上げることすらできなかったのだ。

「ぬ、温井！　もしかして力が　」

言いかけた僕に、温井ママは「ご名答！」と言い、女将までもがいたずらっぽく正解ボタンを鳴らしてみせる。

「力が、なくなつたつてこと……！？　ほ、本当なの？　ママ　！」

驚愕と困惑とが入り混じつた温井の視線に、温井ママも女将も頷き、王子とロリータまでもがまた拍手を始めた。

「やっぱり、あなたたち二人は本当に愛し合つてることが証明されたのね」

うふふ、とツインテールを触りながら笑つロリータ。

「あっ、愛し　つてなっ、何を言つて……」

にんまり見つめてくるギャラリーたちに、僕はどもり、温井は顔を赤くしている。

「そう、二人の愛が本物なら、この女神温泉に二人で入り、キスを交わすことでこの特殊能力は消えうせる。大昔、オンジヨウノカミ温井神に呪われた乙女。つまり私たちの先祖がそうしたようにね」

どこかで聞いたその名前に反応するよりも先に、温井ママは「ただし」と凜とした声で付け加えた。

「それは乙女が二十歳を迎えるまでに限られる。そしてその相手は、初めてこの特殊能力を知った異性であり、乙女のことを心の底から大事に想い、愛してくれる人でなければならぬ。そして乙女も

その想いに応えなければならぬ。というのが温井家スクイに伝わる秘伝の巻物に書かれた真実よ。だから今までこの力のことには誰にも言うなつて厳しく言ってきたの。私も親からこの方法を知らされたのは、二十歳になる直前だったわ。そうやって、皆、この能力を消してきた。まあ、自分の能力は消えても、また娘を持った場合にはその能力は受け継がれるんだけれどね……」

最後の言葉は切なげに言い終えた温井ママは、同意を求めるように女将のほうを振り返る。

女将もうんうんと頷きながら、僕らを見やった。

「だから沙耶子さんに頼まれて、こうしてレースを開催した、というわけなの。泉お嬢様と、御手洗さん、あなたに来てもらうためにね。私たち女神旅館の者は、秘湯、女神の湯を守っていく者として、皆あの伝説のこと、温井家の女性たちのことも知っているの。だから、秘密もしっかり守っているわ。そのことは心配ご無用ですよ」

「そうよ。全く、あなただったら来年には二十歳になるっていうのに、全く恋人どころか、男っ気すらないんだもの。ママ、心配で、心配で。本当のことを最初から教えてたら、あなたかえって嫌がって来ないと思ったのよ。でも、ママの勘、やっぱり当たってたわね

きつと御手洗くんとならできるはずって信じてたのよ！ 最終問題でキスしてもらったつもりだったけど、あなた自分からしてくれたから」

すっかり母親の顔でそう打ち明けた温井ママ。温井は信じられない、という表情を崩さずに見つめ返した。

「じゃ、じゃあ……あのネットに書かれたレースの噂は全部嘘だったってことなんですか　！？」

まだレースについてのショックが抜けないらしい温井の問いに、温井ママはそんなことか、とでもいうように笑ってみせる。

「そうよ。だってあなた、パパの会社何だか忘れたの？ 若い社員さんたちに手伝ってもらって、ネット上の掲示板やらあちこちに書き込んでもらったってわけ。あなたがよく見てるサイトなんてママには筒抜けなんだから、これぐらい簡単なことよ。だって、こうでもしなきゃ、恋愛音痴のあなたが好きな子と温泉になんて来るわけないんだもの」

そ、そうか　確か温井パパの会社は　インターネット関連だつて言ってたような。

まさかそこまで手を伸ばしての作戦だったとは、そりゃあ温井が気づかなくても仕方ないわな。

って、す、好きな子だって　！？

さらっと肝心なことを言っただけの温井ママに動揺する僕の隣で、温井がぺたんと座り込む。

その耳には、発言の前半しか聞こえなかったようだった。

「そ、そんな……」

今まで抱いていた夢のレースの真相を知って、見るからに落ち込んでいる温井。

けれど僕はこれでようやく納得が行く思いだった。

どう考えてもおかしい対戦方法や、適当に用意されたような外のコース、数々の疑問が解決されたからだ。やっぱり適当なレースをでっちあげたからだっただ。どうりでおかしいと思ったんだよな

。妙にすつきりする僕とは裏腹に、温井は顔を上げようともしない。

僕はどうするかためらったあげく、ふと気づいた疑問を口にせずにはいられなかった。

「え、じゃあ その、王子とロリータさんが前回のレースの対戦相手で、それがきつかけで付き合いだしたつてのは嘘……？」

ぼそつと呟いた僕の声に、王子もロリータも笑った。

「まあ、だってそのレースが存在しなかったんだもの。嘘に決まってるでしょう？」

はあー！？

堂々と言つてのけたロリータと一緒に笑っている王子を見て、僕はものすごく気が抜けていた。

だって、じゃあ あの時温井を獲るかのような発言をしてみせたのも、ただの作戦。演技だったつてことかよ ？

な、なんか……一人燃えてた自分が馬鹿みたいじゃないか。

もはや突っ込む元気もない僕と、落ち込みまくりの温井を励ますかのように、女将はゴングをカンカンと鳴らした。

「でも女神旅館が秘境の宿で、大人気の温泉だつていうのは紛れもない真実よ。さあさあ、これから祝賀パーティーにしましょう！

泉お嬢様の体質が治った記念と、二人の恋のこれからを祈つて盛大に盛り上がるわよっ！！」

司会者の時のテンションを取り戻した女将の高らかな声に、ギャラリーたちも同意を示すように拍手する。

温井ママが本当にほっとしたような顔で娘へと手を差し伸べ、温井もその手を握り返す のかと思いきや、その手は力強く振り払われた。

「ばつ、馬鹿にしないでよ！ そんなの、私一人一体何のために一生懸命……な、何よ何よ、全部勝手に ママなんか、だいつ嫌い

……」

ぼろぼろと大粒の涙を流しながら、露天風呂を出て、駆けていく

温井。

僕はあわててその後ろ姿を追いかけてようとして　頭がくらくと
して、目が回り、盛大に滑って転んだ！

しまった、いいかげん、長風呂しすぎた……ってそんなオチでい
いのかよ　！

心の叫び空しく、僕は見事に気を失ってしまったのだった。

意識が完全に暗くなる寸前、慌てて戻ってきた温井の顔が見えた
ような、そんな気がした。

じゅっさん、忘れちゃいけない、甘い夜!?

目を開けたら、温井のドアップが心配そうにこつちを見ていた。あまりに距離が近すぎて、僕は「うわっ」と思いつきり体をずらし、見事にテーブルの脚に頭をぶつけた。

「いつ、いててて……び、びっくりした〜」

顔をしかめて頭をさする僕を、温井が笑いながら見つめる。

「あ、あれ？ 僕 あっ、そうか。こけたんだっけか」

我ながら間抜けなオチに顔が赤らんでくる。温井はまた浴衣に着替えていて、あわてて見下ろした自分も浴衣を着ているようだった。「あ、それね、王子が着せてくれたんだよ。あっ、王子って言うても、本当はただの温泉好きな高校生で、温泉旅館の息子なだけだったみたいだけどね」

ふふつと笑って言い添えた温井の顔つきは、なぜかすっきりしていて、レースのショックも和らいだようだった。

「本当かよ……実はただのサーフィン好きな高校生の間違いじゃないの？」

僕の冗談にも温井は楽しそうに笑い返し、僕はほつとして身を起こしていた。

カコーンとししおどしの音が響く、先ほどと全然ら変わりのない部屋 こうして二人でいると、今日一日のドタバタがまるで嘘みたかった。

「もうすぐ十二時か なんか一日でいろんなことがあったなあ」
めまぐるしく起こりすぎた普通じゃない出来事の数々を思い出しながら、僕は笑った。

温井は笑って、ちよつと俯いてためらった後、口を開いた。

「ごめんね、隆史くん……なんか色々迷惑かけちゃってさ」

そつと呟くように言う温井。既に乾いた茶色のシヨートボブを触

りながら、どこか悲しげな顔をしている温井に、僕は「何言っただよ」と明るく言っただった。

「そんなのいつものことだろ？ それに
言いかけて、思わず言葉を飲み込む。けれどその続きは、温井も知っているようだった。」

「もう、今日で腐れ縁も終わり、だもんね」

あえて僕が言わなかった言葉をあつさり言われて、僕はためらう。どう返事したらいいのかわからない。

いや、というより本当は 返事をして、認めてしまっのが怖かった。

それでも沈黙はもつと怖くて、僕は「うん」と頷いていた。

温井は黙ったまま僕を見つめて、冷蔵庫の中から白い瓶を二つ持ってきた。

「はい」と差し出されたものは牛乳で、僕が口をつける前に、温井はさつさと蓋を開けて、飲み干していた。

「ぶはーっ！ やっぱりお風呂上りは牛乳だね！ 私、牛乳大好きなんだ」

うん、知ってる。と言いたいのをなんとなく堪えて、僕はただ笑ってやった。

そうだ。温井のことなら色々知ってる。温泉が大好きで、ちょっと困った体質持ちで、世話好きで、とぼけてるけど、実は優しく、明るくて そんな温井が、僕は……。

ぼんやりと形を作り始めている答えに目をつぶって、僕は牛乳をゆっくりと飲んだ。

あの時のキスがなんだったのかとか、僕のこの気持ちは何なのかとか、そんなことを考えても仕方ない。もし温井が望むなら 僕らの『腐れ縁』はもう終わりにするんだ。

特殊体質もなくなった今はもつと、僕が温井と一緒にいなきゃいけない理由なんてないんだから。

考えれば考えるほど、胸がもやもやとムカついて、喉の所まで何

かが出てこようとする。

「ただ僕が最後の扉を開けるのが怖くて、そのまま牛乳を飲み干し、窓辺に立った。」

「暗くて見えない外の庭から、相変わらずししおどしの音が聞こえてくる。」

「もうすぐ終わりなんだ、この秘境の宿での週末も、温井との時間も。」

「ねえ、隆史くん……」

「そつと背中にかけられた温井の声に、僕はびくつとしてしまつ。何を言われるんだろ。頼むから、決定打はやめてくれ。」

「なんでこんなに怖いのかわからないのに、僕はおびえていた。」

「あつ、あのさ。気にしなくていいから」

「えっ？」

「温井に言われる前に言つてしまおうと、僕はわざと明るい声を出した。」

「あつ、あの風呂での キツ、キスのことだけど 気持ち盛り上がつて、やっちゃったんだろ？ 温井のおばさんはああ言つてたけどさ、きつとたまたま偶然だったんだって！ 僕が温井の特異体質を知つてる唯一の男だからつてんで、たまたまが神様が勘違いしてくれちゃったんだよ、きつと」

「隆史くん？」

「温井の硬い声が呼び止めるけど、僕は無視して続けた。」

「だから、僕らがそんな 恋人同士だとかそんなことじゃないんだから、気にすんなつてつてこと！ 大体、僕らはただの『腐れ縁』で、そんな仲じゃないんだし、ばっ、ばかばかしいにもほどがあるよなあ！」

「ははは、と笑つた自分の声がどこか遠くから聞こえているような、変な感覚に襲われながらも僕は笑っていた。」

「だつ、だから、全然僕のことなんか気にしなくていいから 『腐れ縁』も終わるんだし、特異体質もなくなつたんだし、これから

は自由に恋でも……」

何を言ってるんだろう、僕は。

そんなこと本当は 望んでなんかいないのに。

言葉だけが勝手に出てきて、そんな僕を温井は瞳を見開いたまま見ている。

どこことなくその顔が怒っているように見えたけど、僕は自分の口を止められなかった。

止めてしまえば真実が勝手にあふれてきてしまいそうで、自分が自分でわからなかったんだ。

「じゃ、じゃあさ、僕はどこか違う部屋で寝るから……また明日な！」

言って、ようやくこれ以上馬鹿みたいなおしゃべりを終わりにできると部屋を出ようとした瞬間。

スコーンと衝撃が頭に響き、僕は「いでっ」と振り返った。

横にティッシュの箱が落ちていて、どうやら温井が投げたソレが頭を直撃したようだった。

「なっ、何す……」

驚いた僕は、こっちを見ている温井の顔にもっと驚いて、固まった。

「……バカ隆史……」

思いつきりそう叫んだ温井の瞳は涙が盛り上がっていて、両頬は真っ赤になっていたのだ。

「ぬ、温井」

呼びかけた僕より先に、温井が大声で叫ぶ。

「バカもいいとこだよ、バカバカバカ！！ 気持ち盛り上がってキスしただけ？ 気にせず恋でもしろだ？ ふざけてんじゃないわよ！」

耳にツーンと響く温井の怒声に、僕はポカンとする。

間抜けな表情に更に苛ついたのか、温井は涙を流しながら睨みつけている。

「どっ、どんな気持ちでキスしたと思って……おっ、女の子がねえ！ そんな簡単に好きでもない相手にキスなんかできるわけないでしょっ！ し、しかも、ファーストキスなのに」

「え」

「それに、毎日毎日起こしに行ったり、週末一緒に過ごしたり、なんだかんだ理由をつけて呼び出したり、そんなことどうでもいい男にすると思う？ そんなだったら、最初から『腐れ縁』なんてとつくに返上してるわよっ！！」

「そ、それって……！？」

温井の言葉が頭に浸透した瞬間、顔中が熱くなる。

僕の動揺とドキドキが伝染したかのように、温井も見る見るうちに完熟トマト並みに赤くなった。

「う、嬉しかったのに……あの時、露天風呂で 隆史くんも私を大事だっと思ってくれてるんだっと思ってたら、すごく嬉しくなつて……」

「温井……」

露天風呂での自分の発言を思い返し、更に僕はこれ以上ないほどの緊張に包まれた。

「だから、本当は、ずっと」

「ず、ずっと……？」

問い返すと、潤んだ瞳のまま、僕を見上げる温井。心臓が口から飛び出そうなほどにドキドキしている僕。

二人の距離が、ゆっくり、ゆっくりと縮まるうとしたその時。

ガタガターン！！ とすさまじい音を立てながら、襖が倒れてきた。

「あ、いたたた……あなたが押すからよ、王子！」

「何言ってるんだよ、ロリータがもっと近くで聞き耳立てるって言ったんじゃないか」

「まあまあ二人とも喧嘩はおやめなさい、喧嘩は」

またまた別のゴスロリファッションに身を包んだロリータと、浴

衣に戻った王子もとい、温泉好き高校生とその母、女将。わらわらと襖の上に倒れこんだ面々は、悪びれもせずに各自が好きなことを言っている。

「ちよつ、ちよつと」

温井の声に、笑いながら舌を出してみせたのは、彼らの後ろに隠れていた温井ママだった。

「やっぱりママの勘は当たってたんじゃない！ んもう、恥ずかしがっちゃって！」

「ってこれは一体。」

呆然とする僕にもいたずらっぽく笑って、女将がゴングを鳴らした！

「二人でいちやつくにはまだ早い！ さあさあ、今から大卓球大会の始まりよー！！」

「はあー！？」

当然のごとく口から出そうになった文句は、なんと当の温井が嬉しそうな顔をして立ち上がったことで止まる。

「そうよ、温泉といえば卓球！ よーし、どこからでもかかってきなさい！」

浴衣の袖をまくって、元気に笑った温井の声で、僕は仕方なくため息をつくのだった。

まあ、その顔は笑ってたんだけどね。

かくして大卓球大会は日付を超えて延々と続き、異様な盛り上がりを見せた。

意外なことに王子もロリータもかなりの腕で、勝負は均衡する

かと思いきや、圧倒的な僕と温井ペアの勝利となった。

「っていつても、僕は何もしてないんだけどさ。」

「温井があれだけ卓球うまいとは思わなかったな。」

もう真夜中もいいところの時刻にようやく部屋へ戻って、歯磨きしながらそう言うと、温井が得意げにピースサインを出してきた。「へへ〜実はね、近所の卓球クラブに通ってたんだ。やっぱ温泉といえど卓球でしょ？ 浴衣で卓球つてのもまた雰囲気あるし……それで頑張つて腕磨いたつてわけ」

うーん、理屈があつてるような、無理やりなような気もしないでもないけど、まあいいか。

温井が笑つてれば、なんだかそれだけで僕は嬉しかった。

「色々あつたけど 来てよかった。本当にありがとうね、隆史くん」

化粧水なんかをピタピタ付けていた温井は、背中を向けたままそつと言つた。

こつという素直なところが、温井らしいんだよな。

僕はふつと笑いながら、温井の肩に手を置いた。

「僕も結構楽しかったよ。とにかくもう遅いし、寝よっか」

何気なしにそう言つて、メガネを外そうとしてから 僕は大変なことに気づいたのだ。

そうだ！ 部屋……！

「ね、寝る んだよね」

ぴつたりとくつつけて敷かれた二組の布団を並んで見つめて、僕は温井の言葉にごくりと唾を飲み込む。同時に慌ててごまかそうと咳払いをした。

なつ、何をやってんだ。温井に変に思われるじゃないか。

だ、だつてさ、一応僕だって普通の成人男子なわけで、こんな風の一部屋で一緒に眠っちゃったりなんかしなかったら、何をしでかすか っつて何をしでかすつもりだ、御手洗隆史！

さつき何にも考えずに部屋の電気は消しちやつて、寝室の淡い明かりだけになつていて、余計に妖しい雰囲気をかもし出している。

「あ、ぼ、僕あつちに布団持つて行って寝るからさ、温井はここで」

あわててずるずると布団を持っていこうとする僕に、温井は正座したままぼそつと何かを呟いた。

「え？」

「いいよ、って言ったの」

「ええっ!？」

僕の裏返りまくった声に、温井は笑いもせず、赤い顔のままじつと僕を見つめ、言ったのだ。

「いいよ、このままで」

「だっ、だっ、だって温井　!」

転びそうになりながら布団を持った手をどうしていいかわからず右往左往する僕に、温井が笑った。

「いいから寝よ？」

温井の静かな問いかけに、なぜか僕はそれ以上逆らうこともできず、そのまま頷いて布団を下ろした。

ドキドキが静まらないまま、温井が寝転ぶ隣の布団に、そつと横になる。

温井は目を閉じたまま、僕の手を握った。

ひえーっ、どっ、どうしたらいいんだ!

もう何も考えられなくなった僕に、温井が囁く。

「さっきの続き　まだ言っただけじゃあないよ?　私、本当はずっ

とね、隆史くんのこと」

心臓の音がデカすぎて、うまく耳が働かない。

体が火照りすぎて、何が何だかわからない。

ししおどしと、枕もとの時計の音と、温井の声が頭の中で混ざり合っ、反響して、そして最後には心地よい和音を奏で始めていた。

ごめん、なんだか僕……もう限界だ。

「……って何で寝てんのよ、このっ、バカ隆史　っ!」

深夜三時三十分、僕の十九年の人生で一番慌しく、楽しく、そして大変だった一日が終わった。もちろん、隣で温井がそう叫んでいたことなど知る由もなく。

御手洗隆史、脅威の低血圧で、朝はいつも弱く、しかし寝る時にはいつでもどこでも三秒で眠れる。その長所とも取れる短所を、僕がこの時ほど悔やんだことは後にはなかった、かもしれない。

えびろーぐ、そんなこんなで今日も僕らは。

梅雨も遠のいた初夏のある朝、いつものように眠りをむさぼる僕の布団を、問答無用にはぎながら、温井が叫んだ。

「こらっ、御手洗隆史！ 起きなさい！ 早くしないと遅刻しちゃうよっ！」

返事をしないでそのまま寝返りを打って壁際へ逃げ込むと、温井は大きなため息を吐き出す。

「かくなる上は……これだっ！」

そう叫んで温井が取り出したのはフライパンとおたま。ガンガンと打ち鳴らす音に、僕はたまらずに飛び起きた。まるで漫画並みのこの技は、温井がここ数日編み出した必殺技だ。

「頼むからそれやめてくれよ、もう……頭に響いて寝てらんないからな」

ついでにカーテンまで開けられて、まぶしさに顔をしかめた僕の手元に、温井がさつとメガネを差し出す。

「寝てらんないようにやってんでしょーが。ほらっ、とつと起きて顔洗う！ ほらほら、早く〜お腹すいちゃったよう」

おたままで「ハイッ」と嬉しそうに差し出されて、僕は文句を言おうと口を開きかけ、いつものようにあきらめた。だってそんな笑顔向けられちゃあ、美味しい食事の一つや二つや三つや四つ 用意したくなっちゃうんだよな、これが。

やっぱ、いいように使われてるのかも。

ふう、とため息をつきながらも、味噌汁のだしをとるべく、かつおぶしと昆布を取り出す。

冷蔵庫から昨日買っておいたしめじと三尾入りのアジを出した僕の背中から、温井が覗き込んできた。

「わーっ、今日はしめじの味噌汁？ アジの塩焼きも今の時期おいしいよねっ。さすが隆史くん、ちゃんと私の好物買っといってくれて

るんだから」

嬉しそうな笑顔に僕は頭を掻いて、昨日作った筑前煮が入った鍋を火にかけた。

ふんふんふん、と鼻歌を歌いながら周りをうろつく温井に、僕は米を入れたボウルを手渡す。

「はい、これ研いどいて」

メガネをはずして、洗面所へ向かう僕に、温井が「えーっ？」と抗議の声を上げるが、僕はにんまりと笑ってやった。

「水で洗うだけなんだから、それぐらいできるだろ？ ほれ、この前教えたとおり！ 料理の基礎だって少しは知つとかないと、温泉旅館の女将なんかになれないぞ？」

冗談めかして言った僕にふくれて見せながらも、温井は水道の蛇口をひねっていた。

あの時 中学の頃に言った温井の言葉は、本当に本気だったらしい。

文学部に入ったのも、いつか自分で本を書いたりして、温泉について広めたいと思ったからだとか何とか。女将になるなら、経営学部に入ればよかったんじゃないかと考えたことは、内緒にしておいてあげよう。

どこかズレてる温井泉 こんな女の子、他にはいない。温泉に入ればパワーアップしちゃったりする特異体質とはもうお別れしたけれど、それがなくても温井との付き合いはまだまだ続きそうだな。文句を言いながらも、僕はこうして温井に起こされ、飯を作り、呼び出されれば出かけていき、ぶつぶつ言いながらも用事を頼まれたりしている。

ただ、少し変わったことは。

「あつ、隆史くん！ そういえばこれ見てー！」

米を圧力鍋に移し、水加減を見ている僕に、絵葉書らしきものを見せて、温井が笑う。

「王子、じゃなかった守くんから暑中見舞い。また遊びに来てくだ

さいって。この達筆、かなり意外だよなー」

どこかで見たような達筆　ああ、そうだ。女神旅館の看板。
って、あいつが書いたのかよ!?

思わぬところに驚く僕は、更に意外なものを見つけて指差した。

「あ、これ、ロリータさんじゃん。腕組んでる」

懐かしいゴスロリファッションで、王子にぴったりくっついてる
ロリータを発見した僕に、温井は何でもない顔で頷いた。

「そりゃそうだよ、彼女なんだから」

「えっ!?!」

か、彼女って　それは本当だったんだ。

僕の驚愕の深さには気づいていないらしい温井は、自然な笑顔で
絵葉書を覗いた。

「ネットで知り合ったんだって。温泉好きカップル、本当にお似合
いだよね。年の差カップルとは思えないなー」

「えっ、と、年の差?」

「うん。ロリータさんって二十七歳らしいよ」

「ええっ!?!」

「なんかねえ、温泉開発関連の会社に勤めてるって聞いたよ。すご
いよね!」

純粹に感心しているらしい温井の言葉に、いろんな意味で僕は驚
く。

に、二十七。しかも社会人だったとは。もしかして、あのカツコ
で仕事してんのかな。

いいのが、ロリータ。いいのが、ゴスロリ。

「それにしても、まさか温井のおばさん家の本家が女神山にあった
とは知らなかったよな」

あの温井神オンジヨウノカミにまつわる温井家ヌクイとは、代々あの女神山に大きな土地
を持つ地主であつたらしい。レースが終わってから聞いた説明に、
僕と同じく驚いていた温井も頷く。

「そうだよ、大昔に分家して、東京のほうにおばあちゃんたちのお

墓とかもあつたからさ、私も全然知らなかったんだから。ママつたら、本当に水くさいよねっ」

うーん、言葉の意味がちょっと違つてたりする気もしないでもないけど。

爽やかに笑つて気分を切り替えたらしい温井の相変わらずのすばやさに感心しつつ、僕も笑つてやった。

「また夏休みにでも女神山温泉行こうよ。他の週末は違う温泉めぐりで忙しいからさっ」

温井の言葉に、僕は頷く。本当は、もうしばらくあの温泉には行きたくなかつたけど　まあいつか、あの時はレースで、ゆっくりもできなかったしな。

そう、今までと違うのは　僕らが週末ごとに各地の温泉めぐりをするようになったこと。

かといって温泉自体にはあいかわらず大して興味もない。そんな僕の目的といえば……。

「あっ、ねえ。例のやつ買つていたよ。ここ来る前の本屋で一番乗り！」

ちやつかりとカバンから出して自慢してくれる温井のピースサインに、僕は頷く。

「サンキュ。助かるよ」
言つて僕が開いたのは、『料理人を目指せ！』の今月号。

本格的な料理を学びたい人のために最近創刊されたばかりの雑誌だ。

あのレースに参加して、僕は温井の温泉に対する並々ならない情熱に感化されたようで　昔の夢を思い出して、自分もいつちよ本気で目指してみようか、なんて思つちやつたりしている。相変わらずヒョロヒョロメガネで頼りない僕だけど、こうして将来の目標なんかに一生涯懸命な時だけは、僕を見る温井の目がちょっと違うよう……そんな気がしたりして。

「あれ？ 温井 そろそろ出ないと講義に遅れるぞ」

雑誌に熱中していて、ふと気づいた時にはそばで見ていた温井がいなかった。いつの間にか食器は片付けられ、見回した先で、ほんの少し開いたバスルームの扉から鼻歌が聞こえた。

「おいおい、また朝風呂かよ。温井、いいかげん遅刻するぞ」

呼びに行きかけた僕は、カバンの中で点滅しながら動く温井の携帯を見つける。

「あれ？ おばさんからだ。おい、温井、おばさんから電話！」

「ちよつと出といて、あとでかけなおすから」

鼻歌の合間にそう言われて、僕はため息まじりに電話に出た。

「もしもし、おばさん？ あの、温井、今ちよつと手が話せなくて

「
言いかけた僕の言葉を、おばさんのあせつたような声がさえぎつた。」

『そつ、それどころじゃないのよ、隆史くん！ 今、女神旅館の蔵で昔の文献を発見してね とつ、とにかく早く泉に電話に出るよ
うに言つて』

ただごとではないようなおばさんの口調を、更にさえぎつたのは温井の高い声だった。

「きゃあっ！」

突然悲鳴が聞こえて、僕は携帯を放り出し、慌ててバスルームの扉を開けた。

「温井つ、大丈夫か？」

「あ、うん。出ようとして、ちよつと滑っただけ……」

えへへ、と照れ笑いをする温井と、僕の目が合う。

そして下りた目線の先には 泡にまみれた温井の 。

「きゃーっ！ スケベ ツー！」

ガコーン！ とものすごい勢いで石鹸箱が飛んできて、まともに顔を直撃。

そのまま真後ろに倒れる僕の耳に、あわてたような温井の音が聞

こえてくる。

「あ、あれっ？ そんな力入れてないのに……隆史くん！ 隆史くん、しつかりして！」

その声も空しく、僕の意識は薄れていく。

「この感じ　うそおつ、もしかして力が　！？」

慌てる温井が叫ぶ中、僕はゆっくりと目を閉じていた。

『もしもし、泉？ 隆史くん？ 大変なのよ、あの伝説には続きがあつて　泉の場合だけ例外があつたの！　ちょうど呪いを受けてから二十代目の乙女だけは、キスをしても特異体質は治らないらしいのよ！！　どうもあれから力が出てなかったのは、ただ使いすぎただけだったみたいなの！　そろそろ力が復活する頃かもしれないつて……ちよつと、泉！　聞いているーっ！？』

床に転がったままの携帯から、必死な声がそう言っていることなど露知らず　僕は温泉の素のいい香りがする温井の腕に抱かれて、夢の旅路へと出発進行していたわけで。

「隆史くんっ、しつかりしてえ〜っ！！」

御手洗隆史、十九歳。全くもって普通だと自他共に認める大学生。けれど、温泉好きでスーパーミラクルな特異体質もちの温井泉との『腐れ縁』はまだまだ終わりそうにもない。

その関係は少しずつグレードアップしているような、気もしないでもないけど　まあ、こんな毎日も嫌いじゃないんだよな、なんて夢うつつで思いながら。

そんなこんなで今日も僕らのいつもの一日が始まる。

キャラクター原案

・名前
ヌクイイズミ
温泉

・性別

女性

・容姿

微妙に茶髪に染めた、ショートボブ。

ずば抜けて美人、と言うほどでもないが、かと言って不美人でもない。

身長は女性としての平均くらい。太りすぎず痩せすぎず、標準体重を維持している。

細かい描写は、担当者の方にお任せします。

メガネはかけません。

・長所

温泉に浸かっている間は、知能、体力などの身体能力が、爆発的に上昇する。

その効果は、温泉の効能や湯加減などが良いほど、それに比例して増大する。

・短所

定期的に（1日ごと）湯に浸からないと、本来の体調を維持できなくなる。

湯は、風呂でも代替可能。ただし、温泉の元を入れると効果が上がる。

一番良いのは、どこかの温泉に入りに行くこと。

・特技

オススメの温泉地、そのほかスーパー銭湯にある設備など、全ての情報が頭の中に入っている。

実は卓球がめちゃ上手い。

・その他

彼氏いない歴イコール年齢の、文学部一年の女子大生。

実はそれなりにモテてもいるのだが、脅威の鈍感さで全て足蹴にし続けている。

勝負所に弱く、上がり性。

裸眼で視力2・0の持ち主。

風呂上がりの牛乳が幸せ。

人間です！

続きまして、二人目です。

・名前

ミタライタカシ

御手洗隆史

・性別

男性

・容姿

あちこちではねている黒髪のとろ毛。日光に当たると、若干、茶色く見えないこともない。

たれ目でいつも寝ぼけ眼。ファッションセンスは皆無。

長身痩躯、押したら折れてしまいそうな外見。

細い横長のメガネをかけている。

・長所

人の悩みなどを、やんわりと受け止められる。

常時、冷静でいられる（単にテンションが低いだけ？）

・短所

ヒトの話を聞いていないフシがある。

朝に弱い（低血圧）。

・特技

いつでもどこでも、三秒で眠れる。

料理がものすごい上手い。

・その他

子供の頃から料理に親しみ、中学生の頃の夢は料理人さん。腕は、正直プロ顔負け。

現在は、温井と同じ大学に通い（経済学部一年）、自分の将来の目標を探している（ホントに自分は料理人に成りたいのかどうか？）。

さりげない、どうでも良いようなウンチクをたくさん知っている。実は、中学時代からの腐れ縁の温井が、少し気になる存在。

基本的に、いわゆる『カラスの行水』タイプの人間。

見かけによらずインナーマッスルで、運動神経も良い。柔軟性もバツグン。

温井に比べると、驚くほど普通の人。

以上が針井さまから頂いたキャラクター原案です。

自分では全く思いつかないタイプの二人だったので、とても勉強になった執筆でした。

初めてのコメディにも挑戦できて、有意義な企画参加となりました。

針井さま、読んでくださった皆様、ありがとうございました！

「感想等、なんでもお気軽にコメントして下さると大変嬉しいです！」

7月14日 追記

昨日書くのを忘れたので追記です。

お気づきかとは思いますが、作中に出てくる温泉名は、全て実在のものと少しだけ変えてあります。その全て正解できたアナタは温泉レースに参加できるかも！？（笑）

そんなところも含めて、楽しんでいただけると幸いです。

文樹妃 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4127h/>

湯けむり旅情二人旅～温泉レースへようこそ！～

2010年10月8日13時32分発行